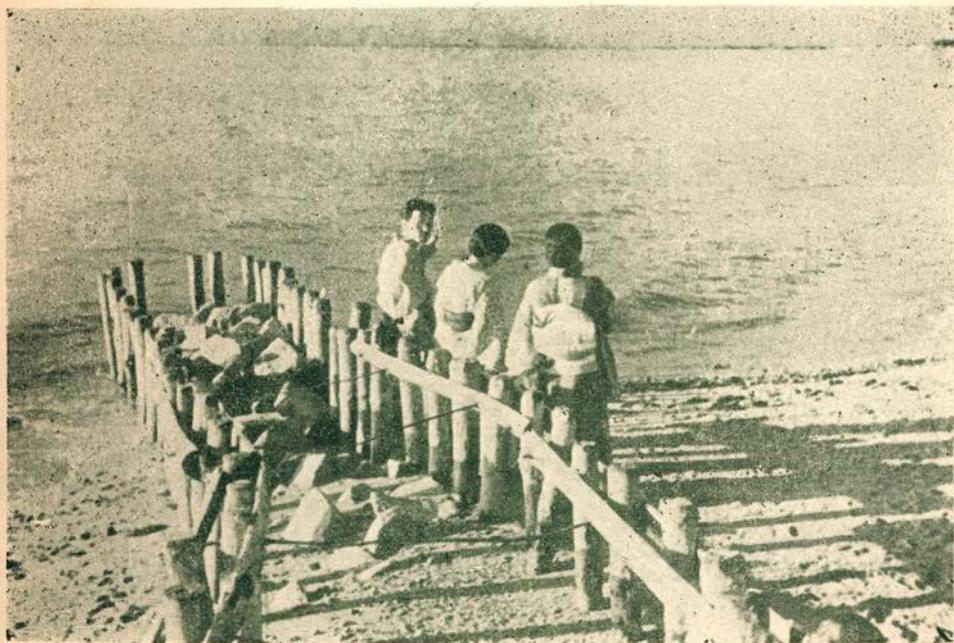


麻 生 路 郎 主 宰

川柳雜誌

八月特輯號



海

！・八月は南海が持つ夏の誇り

泉州沿岸へ

濱寺海水浴場

堺大濱海水浴場

高師の濱海水浴場

深 日 浦

樽 井 濱

二 色 の 濱

大 津 ・ 助 松 濱

諏 訪 の 森 濱

— 案内書呈上 —

大阪・難波

南海電車

洋飲食店の繁榮機關

麻生幸二郎主宰

喫茶新聞

喫茶店・酒場・カフェー・食堂・フルーツパーラー等の繁榮機關として八月一日創刊。近代的な編輯振りと興味横溢せる記事の滿載とは本紙の特色なり

大阪市西成區玉出本通三丁目三六

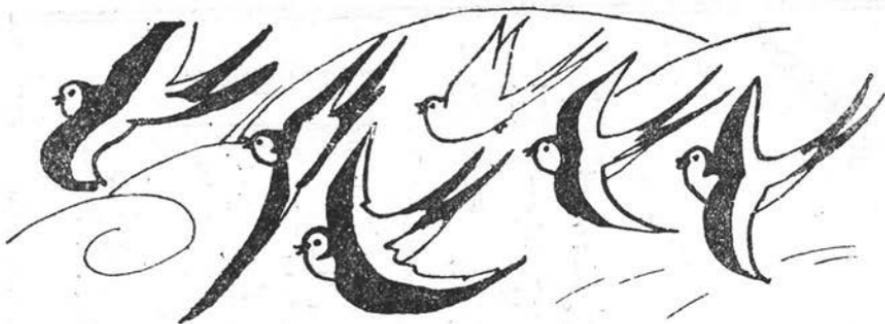
發行所 喫茶新聞社

電話 天下茶屋二五七九番
振替 大阪三〇三九三(麻生幸二郎)

毎月一回五日發行
定價部金五錢
一年十六錢郵稅共

懸賞川柳
を募る

課題及投句規定
等に就ては別欄
廣告參照の事



第十二卷 第八號 川柳雜誌八月特輯號目次

箇人句集と半文錢……………麻生路郎(六)

再び定型非定型を論ず……………松丘町二(六)

武玉川初篇研究(二五)……………梅本秋の屋(三)
梅本秋の屋 魚(三)

卓上句評

眼と心臓、臍……………福田山雨樓(五)
句を貫く……………松丘町二(五)

肱枕艸紙(八)……………梅本塵山(六)

柳人を語る……………(六)

散財橋本イズム……………麻生路郎

慌てぬ花童子君……………岸本水府

川村花菱さん……………窪田銀波樓

金短冊異變……………森 雞牛子

二タ昔前の三太郎氏……………安川久流美

花形十題……………(五)

金貨 二南 盗人 鮎美

馬場蹄二の話にしやう食満南北
 自動車代十圓也……………木村半文錢
 墓口無事……………小林不浪人
 震度をはかる顔……………海野夢一佛
 珍馬氏、猫丸さん……………米村あん馬



柳壇畫報
創作

獨身性 翠夢太 天痴人
男 性 機見女重 華水
大 學 司 郎 郎 戀 女 給 人 役 陽
アルプス 民 耶 女 給 人 役 陽
水 靜 華 太 車 太 車

不朽洞句稿

麻生路郎選 (八)

近作柳樽

麻生路郎選 (九)

川柳塔

麻生路郎選 (四)

粒々集

麻生路郎選 (四)

一路集

髭 海 岸 腫

蛭子省二選 (六)
橋本綠雨選 (六)
水谷鮎美選 (六)

日本名所名物川柳 大阪之卷「大阪の夏祭」

麻生路郎選 (四)

各地柳壇

麻生路郎選 (七)

本社七月例會

松盛琴人記 (七)

川柳家戶藉調

山雨樓 (六)

西之町メモ

綠雨 (六)

編輯の窓

山雨樓 (六)

紙 (高師の濱) 寫真

題 字 麻生路郎 (六)



（影撮入友氏河冬初の年二三九一）氏二省子館員客駐本（上）

（影撮氏助儀本来てに厚別氏本米濱の師高鶴海南・夏の早二三九一）妻夫群主郎師生藤（下）



柳・壇・畫・報

ト和岡たげ繪を照し着をし無袖の姓百の堀道・氏しよ萬庄たげ撰てしに 監繪を標生の現りよ右の中行一行吟寺歌地 (上)
 (影撮氏美やあ川北)氏平齋田道が龍泉廟の姿無袖くじ阿・幹主耶跡生藤がイトスル
 (影撮氏みやあ川北にてに願阪大日一月六年三三九一)幹主耶跡生藤のり送見ご氏水紀元春る上に旅の察視蘭鮮は右
 は他のそ・氏るつみ戸江がるせに手を就社目人三方右のそ 幹主耶跡生藤がて立突に突中・瀧波の氏るつみ戸江 (下)
 (影撮氏水華野日華幹部支戸神にてに上板甲丸るらうるせ泊院に横棧戸神月二年三三九一)行一のり送見



再び定型非定型を論ず

—— 福田山雨樓氏へ答ふ ——

松 丘 町 二

期待してゐた福田山雨樓氏の自由律川柳への駁論が出た。堂々眞つ向から所信を翳しての論駁は、氏の對度の眞面目さと共に大變氣持がいゝ。この尊敬の念が私をしてこゝに返事の筆を執らしめた所以であつて、以下論ずるところは、恐らく前稿「定型非定型」と同じことを繰返すに過ぎないかも知れぬ。

さて、氏の自由律川柳の否定は、洗ひ髪の比喻を以て颯爽と始まるのであるが、そして韻律の問題には觸れないと斷つてある通り一言も觸れてゐられないのであるが、この點に先づ氏の論據の救ひがたき誤謬があると思ふ。

そもそも川柳の定型句に於ける十七音字とは何か。單に音字数が十七であるといふことのみに於ては、この數字は數字としての外に何等の意味を持たぬ。定型律とは、決して音字数が十七だからとか、三十一だからとかいふ意味で存在するものではない。もつとも結果からみて、定型律川柳は十七音字であり、定型律短歌は三十一音字ではあるが、それは素朴に指を折つて數へた計算數であつて、その一音字一音字をどんな風に構成しても、その總音字数さへ十七とか三十一とかであれば、常に定

型律をなすとは絶対に限らないのである。在來の川柳なり短歌なりが、定型律の詩としてその特殊な存在と特色ある美しさを主張し得るのは、申すまでもなく前者に於ては五音七音五音の構成排列からなる綜合韻律のためであり、後者に於ては五、七、七、七音のそれであるのだ。従て定型律川柳とは原則として必ずその句の韻律構成が、五音七音五音に分けられ、それらの個々のリズムが五、七、五に組合はされて、初めて定型として完成した定型律美を示すのであつて、十七音字常に必ずしも定型ではない。(川柳の形式とは五、七、五の韻律構成を意味するので、十七音字自體を指すのではない)

右の定型律の約束を無視したりズムから成る句は、たとへ指折りかぞへて十七音字とならうとも、それは既に自由律川柳である。要は發想法の如何とリズムの常不常にあるのだ。たとへば氏の

運轉手君 赤靴も汚れたね
にしても、愚陀君の

どの汽車も胃袋を運んできたよ
にしても、一句を貫くりズムの波動が我々に與へる感度は、

自由律としてゝあつて、いかに結果からみて音字数が十七であつても、定型句とは云はれない。そしてこれらの句の發想法は決して定型律的ではなくて、自由律的である。それが普通の定型句の音字数と一致したのは、偶然であつて必然ではない。この二句は共に七、五、五のリズム構成をなしてゐて、單に數字の上では七と五が顛倒してゐるのに過ぎないから、定型句の特別の場合だと云はれるかも知れぬが。

一目逢ひたいと坑口に泣きくづれ
讀みませうかと戀文を母に見せ

の如く同じく七、五、五音からなる特殊定型句と比較してゐて、兩氏の句がそのリズムに於て如何にこれらの句と異つてゐるか論ずるまでもないと思ふ。

次に氏も云ふ通り定型句必ずしも十七音字とは限らない。併しそれは何處までも定型韻律に依據しての話である。字餘りの句たとへば上五が六音になり、中七が八音又は九音になることはしばしば見受けるところで、例示するにも及ばないが、私の舊作

繩尻を持つた巡查ふと寂し
病人の耳をみてゐてをかしくなれり

の如きは、前者は五、六、五音、後者は五、七、七音であつて、しかも共に定型律をなしてゐる一例である。強いて云へば破調の定型句とでも云へやう。破調と云へば山雨樓氏は、リズムの如何を問はず十七音字のものは勿論のこと、十七音字以内のもの及び十七音字より少々多いものも總て定型句に屬し、その一部のものとは例外的なものとして考へられ、羅門君の

風はなつかしい母とゆく髮匂ふ

の如き純然たる自由律句をさへ尙定型中の破調句だとみてゐられるのは、いさゝか亂暴ではないかと思ふ。

要するに私は定型非定型區別の尺度は發想と韻律に依る外なく、従つて、十七音字の句にも自由律があり、十七音字以外の句にも定型律が存在し得ることを云ひたいので、五、七、五音の定型韻律に依據しながら十七音字以外となつた定型句を普通に破調と呼ぶべきで、要はその句の韻律の如何と發想法の如何にあるのだ。氏のやうに定型句の範圍を寛大に考へることは、屈伸自在で便利ではあらうが、眞の定型律の擁護とはならない。定型律とは五、七、五音の整然たるリズムの波を守つて亂さぬところに、飽くまでも定型律としての特色と美しさがあるのだ。結局定型律を認めると共に、自由律を認める私の蝙蝠的態度を山雨樓氏にしても、閑生・亂耽諸氏の自由律否定論者にして、その人々の創作と鑑賞の態度が之を裏切つて、笑へないと思ふ。實は山雨樓氏以下總て自由律川柳の肯定且實踐者であつて眞に言行一致自由律を否定し得る者は、本格的定型川柳を固守する「番傘」「さやりの」諸氏あるのみ。

尙終りに一言、山雨樓氏は定型句を結髮にたとへ、自由律句は洗ひ髮に相當すると云はれるが、これは自由律にとつても洗ひ髮にとつても迷惑な話で、洗ひ髮は云はゞ素材である。それを五、七、五の油をつけて日本髮に結ぶ場合もあれば、自由なリズムのウエーヴをつけて洋髮にする場合もあり、思ひ切つて十七音以内の斷髮にする場合もあるだらうが、洗ひ髮自身はどこまでも素材であつて何等の韻律を持たない。若し自由律川柳は素材であると敢て云はれるならば、我々は素材にして尙詩的リズムを持つといふ光榮を誇らねばならぬ。



不朽洞句稿

麻生路郎

有限もよしとおもへり米の嵩
人並に女房も持った子も持った
そろばんの三桁四桁の人生か
自動車で歸り來しに わが家がティールーム
秘書といふ名に才能がひしがれて



近作柳樽

路郎選

買つて出た役は電話をかける役
 摺り切れた感情靴を引きづつて
 むつとして捺すゴム印の太くなり
 三面に教師も人の子と解り
 やりどころない淋しさへ大空の鳥
 眼をつむる過ぎし想をいとほしみ
 わが歳へせめては赤い花を活け
 朝涼へ萬年筆を軋ませる
 媚を賣る顔にチツプがさせました
 クリスチャン一切過去に觸れさせず
 鶴嘴へカチリと金で無かりけり
 立腹へ手近に投げるものがなし

大坂 鬼怒夫

同 同

同 同

同 道子

同 同

同 同

同 同

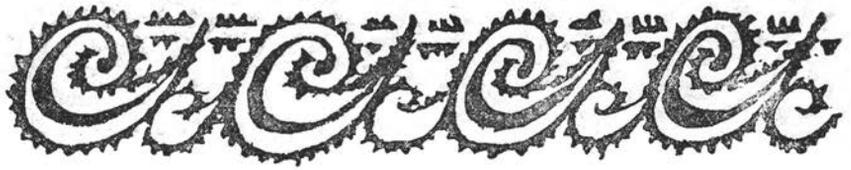
同 真夫

高知

同 同

同 同

同 同



怒りつけたら酢と醤油とをとりちがへ
日當と云へ白丁のしをらしさ
法網の粗なるか某氏以下無罪
つれづれのこの頃知つた豆の味
先刻叱つた子を風呂へ連れ
無口なら無口のやうに疑はれ
赤ん坊の足くすぐつて嬉しい日
お前とも長い苦勞の飯の味
初孫の顔が嬉しい水仕事
大阪の土に成る氣のバスケット
盃洗へ片手手品の様に振り
澄みきつた空へたゆみなき金魚
人世ををかしゆう旗をかつぐなり
その筋にふれぬ程度のピラをくれ
電線へ燕間違ひなくとまり
反對を向いて嬉曳待つてゐる

大阪

喜由

同

柳次

同

同 銀波

同

同 新市街

金澤

同 今雨

同

同



なやみとは乳房の丘のむこうがわ
 太陽を忘れながらもてらされて
 風の街だみんな子供にならないか
 スリッパの温味職業紹介所
 覗かれて覗いて綴方が出来
 下駄上らして来て見ると留守
 鎌光れ光れ麥が熟れたよ

京大瀧川教授問題

権力に象牙の塔もなかりけり
 死にたけりや死ねとおもへり三原山
 夜の灯へ酒のかなしき激情となる
 陽へ胸を張りたり孤獨に堪えず
 エプロンの白さこれが私の生活ですの
 今買うたヨロヨロで来る戎橋
 縫ひながら着て行くところ考へる
 病んでゐてハタキの音も昨日今日

大版 長三郎

高知 秋宵

松江 天痴人

大版 晴夫

同 はるを

同 同



傷ついた心バスケットと戻り 松江 卷二

ポト屋の灯は明々と南風 同 同

油虫夏を忘れて居ないなり 同 同

月おぼろ女給は國が戀しうて 大阪 一雄

この女房俺の女難の一つにて 同 同

支那軍閥

心にもなく抗日に結束し 同 同

負けて去ぬ選手等沈む陽に染り 同 大門

打水の粗相小さうなつて見せ 同 同

六月一日市議選舉

投票に行く靴の紐結びたり 同 同

ラジオ唯雨の伴奏とはなりぬ 同 素月

掃除して圓本重いものと知る 同 同

貞操を必死に護りおちぶれる 東京 銀雪

初對面そのほゝ笑みを外らすまじ 同 同

父さんのトトが大きい子の抗議 大阪 利生



五時、六時、七時、八時と起き揃ひ

メスの音祈る心になつてゐる

度々の手術に氣兼しつくして

ピンセット汚い様につまみ上げ

菜の花を左右にバスの揺れること

身の上を聞いてゐる方も不倅

母の言ふ通り手紙を書き疲れ

當選御禮さようならとは書いてなし

そこにもこゝにも襦袢をかけて梅雨

儲けてゐる事もたまには書いて來い

据置も出來て妻にも買うてやり

代表の靴はキッチンとそろへられ

出世した男同志の唾が飛び

久潤を温めまますと足袋を脱ぎ

當選は泣いて頼んだ顔でなし

三十女のあくびが部屋を一杯にする

神戸

同

茂もよ

名古屋

同

柳水

高知

同

進騎朗

大阪

同

夜王

大阪

同

たけを

神戸

同

霞川

大阪

同

多郎

神戸

同

彌之助



一錢一錢と云ふ子に禿があり	名論を吐くに忙しい咽喉佛	歌詠むと云ひし蛙と日を稼ぐ	奥様を妾とうから知つてゐる	札たばも一日よめばくたびれる	粹な髭今は悪事の役に立ち	監獄を出るに髭のみうらかなし	精力の足りぬ童貞敬はれ	氣苦勞の顔が化粧で直らうか	無提灯を急いで歸る紙芝居	先生と意見が合うて呑みに行き	金塊をあげるに名士の名を並べ	退却はこちからする人違ひ	入學をそつと見送る生の母	住馴れてみれば山家は氣が安く	ストライキ煙突までがのしかゝる
大阪	小松	大和	東京	香川	大阪	神戶	大阪	同	同	同	同	同	同	同	同
青兒	同	しとし	同	翠峯	同	ひさし	同	三汀	同	裸人	同	幸捐	同	菊路	同



制服を脱げばお嫁になれる齡

同

臺灣にては

五月もう浴衣々々の街の巾

臺中 耕 朗

内地へ歸る妹

せめて行李なりと詰めてやる

大阪 同 堂

女給もう慣れて煙草のケースもち

大阪 同 光

一とほりさわつて通る洋服都

同 冬

麥飯が効くとは醫者のたよりなし

高知 同 果

鮮人の汗でレールが延びてゆく

同 同

銀行員生活一ヶ月

算盤の合ふ日は窓の雲が浮き

鳥取 法 泉 子

S 夫人に

婆様になつく養子で頼りなし

同 同

玄關に壁あり帯が見當らさ

六甲 規 堂

小さうでも他所より高い鯉のぼり

同 同

初夏の詩がセルの袂に孕んでる

大阪 葉 光



用のない結婚書報くり擴げ
 争つて見たが社長と給仕です
 はかどらぬ戀だと思ふ切花屋
 どん底に露西亞文學讀む男
 悲しみへ新聞記者は遠慮なし
 寫眞屋へあてにしないで行つてみる
 遮断機でたれか飛び込みさうに待ち
 蛙なく山も五月の音すなり
 理想家と云はれて女うれしがり
 先生にしかられた子は歌がすき
 ハンドバック値切りそこねた金を出し
 腫に青葉頭うつろにして居たい
 ドクダミとオバコ摘んでる母の影
 女店員ばかりの晝へ買ひそびれ
 忍從に堪えて久しき養と笠
 云ひ切つて元の姿になる女

神戸

高知

大聖寺

今治

大坂

愛媛

大坂

高知

繁堂 同 春水 同 草吉 同 曉童 同 白糸 同 芳岸 同 いの助 同 映珠



想像にまかせて人に頼らざる
 びつくりさせた背の柿の葉
 豪らさうな事を云つても養子だよ
 亡き友の趣味が悲しきほたる籠

ひろのカフェー街

エプロンの雫をさけて犬がゐる
 捨てられた仔犬藝妓に拾はれる
 うぬぼれて居てさへ人の下に付き

ひたくと夏は海から渚から

颯爽と路次から女給御出勤

女獨り生きてく窓のシネラリヤ

カウンターの背にして戀のソーダ水

人形の氣持で雨の窓に居る

二人になれば二人の瞳になるよ

祝萬よし氏市議當選

満載の船出帆のかゞやかかし

高知

同 郷村

松江

同 冬生

大阪

同 一杯

高知

同 玲二

神戸

同 麥刀子

松江

同 粹句樓

同

大阪

方 眠



親類としてどこ迄の心やら
 死んでしまへと意見されたも十八九
 お互が達者をほめて薬風呂
 しつかりと螢おさへた聲で呼び
 同 素 萌

安威川上流漁業場解禁

吸ひさしのバットで鮎を指してゐる
 雨一つ二つカンカン帽に知り
 殺されて女多情な事にされ
 食ふ事にことかぐなど、學校出
 あつばけな蚊に仰山な疔をたて
 水道と女の聲で春が暮れ
 同 紫 陽
 同 故 虚 白
 同 茜 草 女

陸軍墓地の英靈に捧ぐ

英靈よわらびも伸びた初夏ですよ
 ホームラン子のある様な顔でなし
 同 某 人

大掃除施行

捨てるもの何んにもなくて掃除すみ
 同



臙首になる噂を聴いて二百撞き
 末の子の帯皮ゆるみ灯がともり
 指の骨鳴らしていざや飛こまん
 夫婦連空家覗いてプラン立て
 寶塚親をわすれた顔でゐる
 父と來た子が噴水でよく喋り
 キャンピング灯を點けてから恐くなり
 山に來て一人ぼつちが淋しいな
 祖父の尻はいつもおんなじリズムなり
 窓あけて四月の馬鹿と話してゐる
 師を訪へば洒落て肥桶に肩借られ
 いたづらへ叱れば切符切りヤアーイ
 腕時計急がしく見る令夫人
 子の爲に何んで我が血をおしもうぞ
 海越て山越て來た湯の街や
 娘の微笑の切ないまでに迫ります

神戶	同	大阪	京都	同	同	同	大阪	同	同	東京	同	大阪	同	同	同	高知
情	詩	一	富美三	黑天子	迂均	龍北	弓磨	一沫	一馬	由多加	糖坊	笛秀	巷巴	同	草路	



看護婦の生れば店は狭く見え
税金の滞納額は又さがり
天才は天才金はないのなり
ヨロヨロ屋黙つてざつとこんな風
動くのは醫者の慈悲なりむごたらし
今日も又寝て居た方が増しだつた
いゝ経験積んだと友の淋しさう
頬を傳ふは負けまいとする涙なり
女給ふと自己を凝視る晝となり
病弱が父に不足の兒となりぬ
傳票の裏へ主題歌寫させ
サラリーといふ名おこぼれ貰つて
金のある夫の趣味を不安がり
故郷を捨てゝ断片的に生き
口笛はだれが吹いてるセレナーデ
自轉車へ野いばらしきりに匂ふなり
宿命とあきらめ歌を持ち直し

松江	和歌山	松江	神戸	大阪	米子	大阪	真根	大阪	京都	大阪	神戸	加賀	大阪	今治	鳥根	同
祥	三	榮	秋	角	圓	泊	青	秋	白	小	高	義	葉	十	六	三
月	郎	吉	彦	丸	太郎	童	波	光	扇	舟	雄	風	子	靜	郎	樓



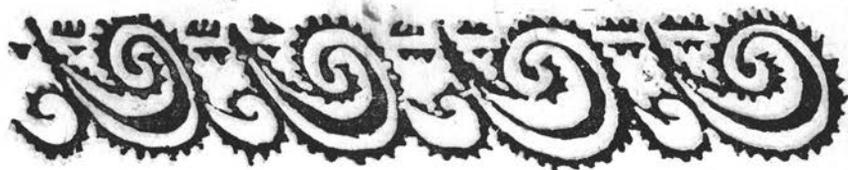
時 間 勵 行 出 席 す れ ば 吾 一 人
 垢 じ み た 子 を 先 生 も 冷 た く 見
 戀 の な い 机 の 上 の 便 箋 紙
 男 性 的 だ 等 と 女 は 惚 れ て 居 る
 歡 迎 の 無 口 の 人 に あ る 泪
 シ ャ ポ ン 玉 母 が 吹 い て も 消 え て ゆ く
 旅 か ら の 便 り を 前 に し づ か な り
 水 か ら は 何 の 愚 痴 さ へ 聞 か ぬ な り
 笑 は れ る 癖 と も な つ て 今 日 も 無 事
 淋 し い と 云 ふ の も 戀 の テ ク ニ ッ ク
 紙 芝 居 熱 入 れ す ぎ て 涙 だ し
 忠 告 を し て る に 友 は 笑 ふ な り
 世 帯 苦 と 云 は す 女 の ア ッ パ ッ パ
 半 皮 を 打 つ て る 前 に 子 が し や が み
 蚯 蚓 腫 れ サ ー カ ス の 子 に ふ と 見 つ け
 意 地 張 り の ポ ン チ に さ れ る 菊 五 郎
 な や み の 日 な り な ぐ さ め ら れ る 顔 も し て

愛 媛 世 都 象
 島 根 汀 雨
 愛 媛 義 人
 松 山 春 峰
 愛 媛 南 葉
 石 川 北 陽 子
 大 阪 美 津 女
 金 澤 文 路
 松 江 莞 路
 大 阪 郁 二
 長 瀬 太 公 望
 大 阪 九 文 錢
 松 山 一 紫
 大 阪 白 蝶
 福 岡 呆 朗 兒
 大 阪 柳 三
 河 一 羊



プラタナス庭一杯の初夏よ
 青春をうつたへる様なハーモニカ
 街に買はれた蟹は悲しや
 プラットの足ステップを踏んで待ち
 満蒙の色が變つた世界地圖
 足跡の苗に並んだ五月の田
 さびしさは極まりぬべし頃の髯
 着せる日の樂しさへたゞ縫ひ續け
 區劃整然と隣雪をかき
 みんな夢だつた酒と握手しやう
 夜ならぬ道頓堀を云ひわけし
 終點へ残る包みのグロテスク
 惚れさせてから本當の眉になり
 誘惑の神火は炎ゆる三原山
 尖銳な第六感へ來る辭令
 解消の父は陸軍豫備大尉
 水都祭花火背にしたランデブー

大阪 愛媛 今治 同 松江 島根 大阪 兵庫 大阪 兵庫 松江 大塚寺 同 大阪 名古屋 廣島 大阪
 天馬 宵明 曉嶺 磨須雄 砂詩朗 鶉天巢 窮巢 愚生 政太郎 富士子 慕秋 醉羊 佐津美 木圭 ひかる 華春 吳竹



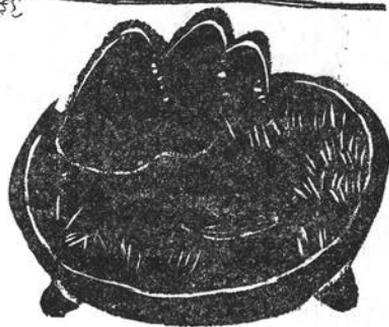
環魂のかさくくと鳴る酒場の灯
 雨の夜を素直に妻の物に成り
 御佛前小使さんに借りた金
 惚れられてその短所をば見つけ出し
 髭引いてかゝわりのない席に居る
 政情が可笑しく鶏に餌をやり
 月給も所得かゝらぬまゝに過ぎ
 公園の事務所花壇の花を生け
 なる様になつた映畫にホッとす
 引越のたんびに高い家を借り
 團參の飛行機見てるのが遅れ
 失戀の痛手ネオンに親しませ
 視線の放射を蹴る踊子の足
 死線をば越してしまつて日がながく
 バイロンも紙屑の値に買はれたり
 高い値を付けにや賣れない物もあり

同	大阪	壱ヶ池	大阪	壱ヶ池	同	大阪	壱ヶ池	豊中	大阪	高知	大阪	大阪	神戸	同	同
芳	青	一	九	露	元	富	普	五	北	鐵	眞	あ	棄	山	よ
一	米	美	波	洲	山	士	門	一	人	吉	太	美	郎	茶	つ
						雄								花	葉



病んでゐて巡査を憎むをとこです
 金の要ることに馴れてる故里の親
 口眞一文字にのびて女の意地となる
 ビクニツク双眼鏡へシヤンも出る
 片戀の日記だけで済されず
 たゞ我武者羅に詰めよる若さや
 まいないをとるに君らは忙しき
 耳朶をはじくと女給返事する
 友情へ白紙になつて委すなり
 順番を待たす怪我人診て貰ひ
 鹿島立つ姉に妹はテীব投げ
 茶柱の後に嬉しい電話にて
 汗出した事無き神馬素直なり
 小説を節面白く母へ讀み
 風かろくく散歩の口笛よ
 公休の雨に氣ますく煙草吸ふ
 頼られた女に袂なぶらせる
 二階がりたまに女の客も来る

臺ヶ池 大阪 噴兒
 大阪 操川
 臺ヶ池 吞吸
 松江 十石
 臺ヶ池 松雨
 京都 啓秀
 臺ヶ池 愚寵
 神戸 吉左
 臺ヶ池 舟家
 大阪 愛子
 同 久子
 同 堅
 同 美和子
 同 良之佑
 臺ヶ池 縷紅
 松江 みのる
 大阪 燦宵
 同 柳夢



箇人句集と半文錢

麻 生 路 郎

箇人句集はその作家の價値を社會に問ふ意味に於きまして尤も有意義なものであります。一面その全貌がハツキリすればするほど、これを手にした人々は一顧の價なしとして棄て、願ひぬ場合と、その著者を異數の作家として憧憬し心酔しする場合があります。

尤も一顧の價なしとして棄てられた句集も後世に於てこれが天才的價値を認識せられることがないとは云へませぬが、その當時の著者にとつてはあまりに手痛い清算のされ方であることは、しいことであります。資本論では世界的に偉人たり得たマルクスの如きも、その處女出版が詩集であり、その詩集に對して世人が一顧も與へなかつたといふ事實は面白いと思ひます。マルクスほどの人物も詩人としての地位が獲得出来なかつたことは彼にとつて、果して幸か不幸かは知りま

せぬが詩人の天分といふものが常識や科學を超越しての存在であることを思はしめるではありませんか。

さうした觀點から見まして個人句集は社會的に華やかな存在であり得るよりも寂びしき存在となりがちであります。著者自身から申しましても個人句集は作品の墓場となり勝ちであります。これは人間の本能が持つ棄てかねる自己の表はれであるとも言へます。従來世にあらはれました個人句集を見まするのに、そのあらはれ方に於きまして、作品の良否をとはず著者自らの意思によつて上梓せられた個人句集と、著者は何等關知することなく後人の手によつて刊行せられたものと、著者の承認を得て第三者が出版したものとの三種に大別することが出来るやうであります。私が携つてまゐりました柳壇三十年を回顧いたします時、前述三種の個人句集刊行

の例も尠くはないのでありますが、その多くは私のいふ華やかな存在といふよりも寂びしき存在となり終つた句集が多いのであります。それ等の句集は質の良否、句数の多寡、型の大小、装禎の如何に拘はらず、物心兩様、幾多の犠牲が拂はれて社會に送り出されたものであることは云ふまでもありませんが、これが存在的意義のあるものは雨夜の星にも比すべく洵に寥々たるものであります。

私も個人句集の刊行を幾度か知己友人からすゝめられたこともあり、社中の手によつて拙句の蒐集に着手されたことさへありました。が、上述の意味から未だに刊行を企てずに居ります。これはいゝことが悪いことか知りませぬが、出す以上は相當のものでありたいと思ひます。たとへ社會的存在は華やかでなくとも私自身の心を慰めるに足るものであつて欲しいといふやうなことが考へられるのであります。思ふて句を檢する時、後人に遺すべくあまりに佳句に乏しいのを恥づるのであります。まだく精進すべきであると思ひ、遽に個人句集刊行のことを考へないのであります。しかし、この私の心を他に強ゆべきでないことはいふまでもありませんので他人から個人句集の寄贈をうけました際に、私は心からその著者の意氣に敬意を表すると共に、ポツリ／＼拾ひ讀みいたします。共鳴すべき佳吟に接しました時には著者と親しく相語るの欣びを禁じ得ないものであります。曾て上梓されました異色ある句集として自分の親しく味讀いたしましたものうちに信子句集「蒼空」があります。勿論この句集とて收め

られた總ての句が優れてゐるといふのではありませんが、一女性が、所謂川柳の規矩に捉はれず自由により己の心境をゆすぶり出してゐられるのをうれしく思つたからでありました。

ものいふて愚かな顔を派手にする

ボカンとした顔で答は濟んで居た

門のびつたりどこで息をする

氣がつけば女は狭い坐りやう

など當時私の愛誦した句であります。これは白石維想樓君が編んだものであります。「川柳當百句集」もうれしく拜見した個人句集の一つであります。これは大正三年に柳壇を去つた西田當百君のため、昭和二年に、番傘の社編として刊行されたものであります。斯うして纏められて見ると家庭川柳の名によつて謳はれてゐた當百君の持つ川柳味か奈邊にあつたか窺はれます。斯ういふ方面に力を盡すことの薄い番傘社として當百句集の刊行は上出来だと、ひそかに敬意を表してゐる次第であります。この外、安川久流美君の「かさ松葉」篠原春雨君の「春雨句集」今井卯木君の在世時代に出た「川柳卯木句抄」、荒木京之助君の「荒木京之助句集」等々々、私の記憶を辿るだけでも十指を下らぬであります。が、出版費に比して内容が比較的に劣りするもの、物質の不足から著者に對してあまりに氣の毒な感じのするもの、僅に著者の自負心を満足せしめたのに過ぎないと思はれるやうなものゝあることも否めないであります。尤も前述の句集が何れもそれであると申して居るのではありませんから誤解なきやう願ひます。

近時、京都の村岸清堂君の犠牲的努力によつて川柳叢書が生まれ、そのシリーズの中に個人句集として既に「松窓句集」「福造句集」が刊行され、今又「半文錢句集」が上梓された。松窓、福造の兩君は共に京都柳壇の重鎮であり、殊に「松窓句集」には拙序に於て悪文を弄してありますので、こゝで重ねて贅言を費さないことゝいたします。

「半文錢句集」は昨日著者から一部寄贈をうけましたので早速巻を開き、その句境に浸らふとしてみましたところ、偶々來訪者の俗談に遮ぎられ、僅に十數頁を拾ひ讀みただけでありますから、句集の内容について語ることは避けたいと思ひます。尤も讀破しなくとも本句集が新らしい川柳に於ける一異彩であることは従來同君の佳吟を愛誦いたしてまゐりました私としては云ひ切れぬこともないのでありますが、私の批評が先入主となることは著者にとつても諸君にとつても御迷惑であらうと思ひますので各自の批判に俟つことゝいたします。しかし

まぢがつたことには人の親となり
の如き、自己批判のメスの辛辣さ

運といふあの化けものを追つ駈ける
の如き、技巧の輕巧さには流石に半文錢君なるかなと三嘆せしめられるのであります。

この「半文錢句集」に次いで九月には明治柳壇の鬼才、小島六厘坊の「六厘坊句集」が刊行される豫定となつて居りますが、六厘坊は御承知の如く大阪柳壇を今日あらしめた恩人

で、當時の柳友、當百、松窓、半文錢、路地の合纂といふことになつて居ります。「川柳街」の七月號に半文錢君が「六厘坊句集」について書いて居られますのを拜見いたしますと「六厘坊句集」の材料が全く散逸してゐて手のつけやうがないやうに思はれるでありませうが、曾て私の清記した句集の礎稿こそ紛失はいたしました。私の手許には「新編柳壇」もあれば「葉柳」もあるし、「土團子」もあるし、日本新聞の切抜（土岐哀果氏の所有されしもの）、六厘坊選の「新報柳壇」の切抜（これはホンの僅ではあるが、こゝにのみある日車君が選を擔當されるやうになる少し前のもの）、岩田郷左衛門編の「やなぎだる」、それから「矢車」「江戸紫」其他があるから句の大半は大丈夫集まる自信があります。また六厘坊句集に對する充分な打合せが行はれて居りませんので、あつした半文錢君の一文が掲げられたものと思ひます。この點、半文錢君も、その他の諸君も御安心願ひたいのであります。しかし萬全を期するためには、あの半文錢君の執筆されたものが役立つて意外の收獲のあることを、私からも諸君に切望する次第であります。

個人句集といふことから思はず「六厘坊句集」について多くの言を費しましたが、六厘坊が亡くなつてから廿五年後の今日にこの句集が刊行されるといふことは私たち友人だけの欣びではありません。この一事だけでも清堂君の川柳叢書の刊行事業は有意義であります。

個人句集に對する所感はこれ位に止めまして次に今夕の主

賓木村半文錢君について少しく語りたいと存じます。

半文錢君は御承知の如く十數年間に、稀にしか句會に出席されてゐないので、今日の川柳家とは殆んど面識が無いと云つてもいゝのであります。今夕御出席の諸君のうちにも、今春の六厘坊廿五回忌に缺席されてゐたならば面識のない方が多からうと思ひます。半文錢君は昭和の大阪に住んでゐる昭和の大阪を知られないかも知れません。戎橋も長く渡つたことがないとは「玉むし」五週年の時の歸りに、同君の述懐であつたからであります。新聞を通しての大阪については勿論知つて居られることゝは思ひますが、新聞を通してであればニューヨークからでも、ロンドンからでも知ることが出来ませんが、私の申して居りますのはそんな意味ではありません。尤も道頓堀に浸つてゐる道頓堀を知らない木偶人もゐる世の中ですから、それ等と比較すれば半文錢君の方がより以上に昭和の大阪をも知つて居られるとも云へるでせう。

しかし過去の大阪について如何に造詣が深いかは「川柳雜誌」の「千日前今昔史」をお讀みなられた諸君はうなづき得るでありませう。斯くの如き半文錢君の過去と現在は相異つたものをもつてゐられるのであります。

半文錢君は自ら狷介であると稱し、常に筆に於てもその事を發表して居られます。或はさうかも知れないと思はれます一時はさうであつたかとも思はれます。が、自分でそんなことを口にされ又筆にされるだけに眞の狷介であるとも思へないのであります。同君の昔を知る私たちには一時はさうであ

つたかとも思はれます。が、自分でそんなことを口にされ、又筆にされるだけに眞の狷介であるとも思へないのであります。同君の昔を知る私たちには一時はてらつてゐられるやうにもうけとられ、困つたもんだといふ感じも與へられました。が今日では私たちにそれほどの自稱狷介さは見せられないのであります。「葉柳」時代の半文錢君は引合に出して恐縮ですが中村喜月君などと同じやうに多少今日でいふ不良じみた青年でありました。従つて頗ぶる世慣れた融通性に富んだ青年でありました。「番傘」初期時代には全く融通無礙とでも云ひたい程呑込みのいゝ若者で一見おツさんといふ感じがいたして居りました。同年輩の川柳家よりもズツと老成さを見せ、町内の世話人といふ格で「番傘」のいきさつから、所謂遊びの始末までも片づけるていゝの心も軽く身も軽くといふ捌け方でした。

若し今日の半文錢君が自ら云ふが如く厭人的な狷介な人間であるとすれば極端から極端に走られたものといふことが出来ます。しかしあれだけ明るい性格の持主であつた半文錢君が厭人的な逃避的な闇い性格に變化して行くまでには人知れぬ浮世の荒波に揉まれた結果であることは想像に難くないであらうと思ひます。思つたら思つたことを洒落氣交りに快調に語つてゐた半文錢君が、特別の場合でなければ口を開かなくなり、そしてどつちかと云へば考へ込む人間になられたのであります。しかしそれだけ半文錢君は世間から見れば狷介

にも見へたでありませうが、彼身自がみがかれて行つたことは同君の作品を通じて窺ひ得られるでありませう。今日の半文錢君は決して諸君とつきあひいゝ人ではありませんが、全然つきあひ悪い人でもありません。しかし半文錢君に一入優れた才能を發揮して貰ふためには今日の清貧に甘んじて貰ふことゝ、いろんな煩はしい仕事を持込んで同君に寄り道させないことであります。柳壇に一人や二人孤獨性の異彩を持つことは一服の清涼劑として、のぞましいことだと自分は思つて居ります。

半文錢君はもとくゝ典型的な「番傘」派の川柳家でありましたが、私と同君と同じ秋の茶屋に移り住んだころ、私の家へ毎日のやうに気軽に來訪され、目と鼻の間に住んでゐましたので私もひまさへあれば出かけて私等の主張について語つてゐました。

「轍」「矢車」「雪」「土圍子」と生命的な川柳の新しい運動に没頭してゐました私はその頃日車君と共に句だけ遣さうといふ意味から「後の葉柳」を出すことになり、それへ遂々半文錢君を引摺り込んでしまつたのであります。

それから少しく後のことではありますが私は考へるところがあつて川柳の社會化を提唱いたしましたその機關誌として「川柳雜誌」を刊行し、半文錢君は日車君等と「小康」に據

つて川柳の革新運動に走られたのであります。今回上梓された「半文錢句集」は半文錢君が句を生命的に扱はれ出した「小康」以後の作品であることは御覽の通りであります。

「後の葉柳」によつて一轉機をされました半文錢君は一楊柳「小康」次いで「氷原」「對照」「影像」「川柳人」等に據つて自己の詩才を縦横に驅使して來られたのであります。

その後「底」の刊行を企てられましたが既に事務的な仕事に物臭さとなられた半文錢君は「底」の一號を出したきりで雜誌の刊行とは縁を絶たされたのであります。私の主宰して居ります「川柳雜誌」にも時折稿を寄せられることは諸君の知らるゝ通りであります。

今日「半文錢句集」成り、その祝賀記念會を開催するに及び、私は半文錢君が踏破して來られた悪戰苦闘の行程をつぶさに知つて居りますが故に、この同志のため一掬の涙を以て祝福せざるを得ないのであります。そして他日更に同君の熾烈なる作句精進による第二半文錢句集の刊行を期待するものであります。終りに駄辯を弄して却つて半文錢君を傷けたことの多いのをお詫びいたしますと共に殺人的暑さにもかゝりませず、諸君の御靜聽を煩はし得ましたことを深謝する次第であります。(七月十二日卓球會館に於ける半文錢句集刊行記念祝賀會講演)

本社十週年記念事業の一つとして

東
京
句
會
開
催

川柳の社會化を主唱して茲に十星霜。その機關誌「川柳雜誌」は全日本は勿論遠く海外にまで羽翼を延ばして光輝燦然たるものがあります。我が社は斯かる歴史を一層意義あらしめんがために關東川柳家の應援の下に今秋十月中旬の佳日を卜して**本社東京句會**を開催することにしました。全國川柳家諸賢の參加を切望します。日時、會場其他に就ては追つて發表致します。

川
柳
雜
誌
社



武玉川初篇研究

(十五)

梅本秋の屋
森東省二魚
姪子

(427) 宿下の土産に咄す紋所

省二 紋所の講釋を、家族はさぞ有難く聞いた事であらう
秋の屋 奥様より頂いた御小袖、身に餘る光榮である。
東魚 主人を敬つてゐる、實直な氣分がうかゞはれる。

(428) 奉幣のうち氷る侍

省二 神に供物幣帛を捧げ奉る事。(日光への奉幣使などは莊嚴なものであつた)。儀式裡かしまつて居る侍は、寒さに凍りつく思ひである。
秋の屋 野前使その外の奉幣使は、十二月に派遣されるのであるから、夫れに隨從する侍等は、身内も凍る程であらう。
東魚 先年二月淀川の長さ四百間の長橋の竣工式に列席したが、川風の寒さで祝詞の間のつらかつた事は——此句をてみ

つくゞ思出す。

(429) 度々智恵の戻る筑嶋

省二 例へば經ヶ島は、平清盛が舟行の便のため、兵庫の一角に埋立を行つた處、風波にさらはれてしまつたので、人柱を以て再度工事に着手せんとしたのを、諫むる者あつて、一切經を一石に一字づゝ記し、基礎材料に埋設したと傳へらる。――前述の如く歴史的に見なくても、埋立の難工事なるは、それが昔である丈けに判る。だから「ひづんだ家を譽る築島」(ム三) 秋の屋 剛腹漢平相國も、兵庫の築島に就ては、その意見を屢々變へたのである。
東魚 實際海岸の護岸工事とか、埋立とか云ふものは、設計者も随分なやまされる。今日の科學を以てしても尙そうだ、昔はやつてみては、又手段を變へくした事であらう。

(430) 葵か咲てうくひすは闇

秋の屋二此「葵」は、加茂祭に使用される二葉の葵ではなく、花葵のことで、此花の咲く頃に、鶯は木の下闇に隠れるのである。

東 魚二鶯は老いて價値なくなつた意を、闇と云つたのではないか。

省 二二「鶯の老の榮花に葵咲き」と云ふ句があつたとしてら、原句に列べ得られよう。

(431) 縫ふ人を空からなふる時明り

秋の屋二陰晴常無き秋の空が、或る時は明るく、或る時は暗く物を縫ふ針妙を翻るやうだと云ふのである。「此時秋色半陰晴」といふ詩句がある。

東 魚二贊
省 二二氣分がいら／＼するもの。

(432) 大工とさしに引越の椽

秋の屋二移轉する先の家で、造作などを變へる爲に大工を呼び、其「事中に、主人が大工を相手にして、椽先で献酬するといふ句である。

東 魚二和やかな氣分の句だ。
省 二二差向で茶でも呑むのかと解してゐた。献酬にまじ及べは複雑となる。(椽は縁が正し)

433 旅人立てくらく成る家

省 二二旅客が出立した後は、ひつそりとして靜かさに返る燈火も減りはするのである。

秋農屋二出立する晴天に、坐敷に蠟燭などを點し連ねて、甚明るく賑かであつたが、出立して後は、特に家内が暗く寂しく思はれるのである。

東 魚二「暗く」と云ふかげに、人の去つた淋しさの感じられる點が良い。

(434) 日本の裾は風ほとに明く

省 二二女の歩む裾さばきの美——萬載狂歌集に「さほ姫のすそ吹返しやはらかなげしきをそつと見する春風」(貞徳)。最近支那のモガ連中、ノー、ストツキングに赤色のズボーズをはき、歩く度びに夫れが少し見えるのを得意として居るそうだが彼等の極端な性向を示して居る、——「どうしても大またになる裏模様」(拾遺)などもある。

秋の屋二虎の皮よりも恐ろしい色彩が、多くの男達に注目される。

東 魚二浮世繪が歩き出したやうな句だ。

(435) 棧敷へ居る母の中垣

省 二二芝居見物、監督嚴重。
秋の屋二此垣一重が黒金の」か。
東 魚二氣のきかない母親だ。

(436) 腕をさすつて狸煮て居

省 二二狸狩をして得意満面。狸汁(狸肉を味噌汁にて煮る)をして居るのである。武九に「關守の勝手へ招く狸汁」
秋の屋二腕自慢の武士などが、捕獲した狸を汁に煮て食ひながら、手柄話をするのである。

東 魚二贊
省 二二昔の狸汁といふは、前記の如きもの、謂ではなく、

焼皮料理であつたさうだ。其詳細は丸礫雜考にある。又蒟蒻を味噌汁煮したもの一名狸汁と云つた事は嬉遊笑覽の飲食の部に出て居る。味噌汁にしたものもあつたは無論の事、美味求真には、狸料理は昔は流行したるものなるも、今狸少くなりて昔の如くならず。シユンは十二月より二三月の頃迄とす。料理物語の中に、狸汁野ばしりは皮を剥ぐ、みたぬきは焼きはぎよし味噌汁に仕立て候、古法は味噌汁にあらす候。大根牛蒡外色々添ふ。酒の粕、酒鹽を用ひたりとあり。親之日記に、寛正六年十二月朔日御被官廣戸但馬入道狸進上、之を汁にすることとあり、又大草料理のむじな汁とは此の料理なり。と

東 魚 家藏の本には腕が腕になつてゐて、それを腕と版木を直したあとがあります。ワンと假名が振つてあるのが所持者が書いたのか、版かどうも判じかねる。

省 二 私の借覽本に就ては氣付きませんでした。

(437) 生酔の後口通れは寄かより

省 二 此句柳多留七にも出づ。生酔は突ツかい棒を欲しがるもの。——型の似た句に「柔取めつたに人に寄かより」(ム六)

秋の屋 近頃東京の割灸店、待合茶屋などで、客に脇息に寄懸らせるが、あれは貴族的で面白くない。明治の末頃より流行り出したもので、昔は決して無かつたものだ。

東 魚 うがつた句だ、面白い。

(438) 神の穴に錨の投やり

秋の屋 神祭りに擔き出す神を根こぎになし、その錨を其儘投遣りにすると云ふので、祭禮の準備の多忙なさまを詠むのだであらう。

東 魚 神の事だから掘取るには、土地の人にかけて、神事

の關係者が掘つたが、さう云ふ連中だから、跡始末は、土地の百姓達にでも、させると云ふ様な事か。

省 二 多忙だからであらう、然かも錨の紛失などを思はぬ處が、祭禮事である。

(439) 寝て居た前を合す稻妻

秋の屋 身窄みのよい女の心理を巧妙に表現した句。

東 魚 不氣味な氣分と、つましい女氣が、巧みに描き出されてゐる。

省 二 湯殿で恥をかくす稻妻」(ム八)

(440) 女房は簾の内て直をこたへ

秋の屋 未だ世馴れぬ商家の新妻が、來客に顔を看られぬやうに、簾の内に居て應答すると云ふのである。

東 魚 若い女房でなくても、よさそうに思はれる。得て縫筋などしながら、店番をしてゐたりするから。

省 二 柳多留五には、「女房は障子の内て直を答へ」

(441) 垢離取の見ぬ振しても樓舟

省 二 川垢離はかなり旺に行はれた。一屋根舟の唄川垢離につぶされる」などの如く。一心に祈願すべきであるが、附近を屋根舟が通ると、氣を奪はれて見ぬ振りしつゝも見る。尤も面白分に参加する連中もあつたらうから。

秋の屋 目に諸の不淨を看ては、口に六根清淨を唱へる甲斐が無い。

東 魚 中には随分野次馬氣分の連中もあつて、どうも樓舟の良い模様を見せられては堪まるまい。

(442) 浪人にまた息の有松囃子

省 二 正月三日より十五日まで唱謡鼓舞するを松囃子と稱した。浪人の昔忘れぬ藝が身助け——「浪人のうごきははじめは松囃子」(ム四)

秋の屋 編笠を被つて路傍に立ち、行人より一錢二錢の合力を頼む、尾羽打枯した身の上である。

東 魚 哀れな自嘲ともとれる。

(443) おもひ直して三絃を弾

省 二 思案する事もあつたであらう。が氣をとり直し三味線でも弾ひて自を慰む。(原本は弦)

秋の屋 此れを世に、「捨撥」といふ歎。

東 魚 澤市もどきか。

(444) 手うつしの闇をいたゞく寒念佛

省 二 闇をいたゞくは面白い。手うつしであるからには。——手へ押付る闇の船賃(ム八)など同巧。

秋の屋 世捨人の寒念佛でも、握り返してみたいと思ふ程の白い花車な手もあらう。

東 魚 言葉が功みだ。「闇をいたゞく」も、いやみに感ない事實に對して適切な描寫であるからであらう。

(445) くほみの家へ蚊遣り草賣

省 二 くほみの陰鬱な家には、蚊も多い事だ。「旅察して香わろき艸の蚊遣かな」(去來)で、艸をくすすべたもの。

秋の屋 「くほみの家」は、如何にも賤の伏屋が想像される。

東 魚 くほみは低い土地といふ意だらう。くほみの家と云

ふ言葉も巧いと思ふ。

(446) 見迄と思ひ極めて惣仕廻

秋の屋 俺も來年はもう三十歳で、遊興も今が罷め時だから此れを最終として、一番總仕舞をして遊ぼう。と云ふのである

東 魚 お説の如くであらう。

省 二 末頼しい惣仕舞だ。

(447) 都鳥けふはきのふの錢を賣

秋の屋 けふといひきのふといひならば飛鳥川であるが、これは隅田川らしいけれど、錢を賣る意が不明である。

東 魚 隅田川の渡守が、前田の梅若忌で夥しくあがつた、渡錢を兩換するといふ場合ではないか。

省 二 お説の如し。

秋の屋 前説は首肯される。

(448) 先てわかるゝ判取の聲

秋の屋 大呉服店の小僧が、賣場の番頭の命に依つて、帳場へ判取に行く時、「判取り——」と長く聲を引いたのであるが、夫れが店内に響き渡る故、「先でわかる」と咏むたの歎。

東 魚 さういふ意味だと思ふが、「わかるるる」が、どうも充分呑み込めぬ。或は皆同じ様に小僧が「判取り」と聲を上げて行くが、帳場へ行けば、これは何誰の判取と各々其販賣係の番頭々に、區別がつくと云ふ様な意味合ひがとも思はれる。

省 二 判取は賣上ケを切る時によび。「何かくんで判取よ茶番よう。」

(449) 返す時機嫌の悪い御圖本

省 二 三世相の句におしいのがあつた筈——社頭の御圖箱

に一錢を入れる。凶、又いれる。凶。遂に十錢共凶であつたといふ。某曰く、神主なんて悪い奴だ——「藏のある繪に安堵する御園本（ムナ）などもある。

秋の屋||縁談の御園などが凶と出られては、一層機嫌が悪からう。併し縁談を拒絶するのに、御園の凶を口實にする場合もある。

東 魚||この句文けみると御園本は返す時には、機嫌の悪いものだときめてしまつたやうで變だが、それは前句の意味合ひをうけて、悪いと云ふ文字を据えたのであるを考へなければならぬ。

(450) うき事のためにちびく呑習い

省 二||憂ひの玉帯「憂事を酒と一度に吞込むて」(一技筌神)にも到らう。

秋の屋||男子ならばよいが、女であるところが災の種となる東 魚||氣の小さい神老位の男を想像する。

(451) 又振袖へ戻る孝行

省 二||二度の勤めも親ゆゑ——相應年丈けたのもゐて「振袖を着ぬと三十女なり」である——ケイ廿「元のしら齒にもどる孝行」。

秋の屋||立舞ふべくもあらぬ身の十四五であるが、親のためならば又已むを得ぬ。

東 魚||二度の勤と云ふより、小娘の時の振袖を又此年になつて、今度は商賣の爲に着る。これも孝行ゆゑだと云ふ意味であらう。

(452) 一ツても義理の届た螢狩

省 二||一匹でも、光つたり消たりしてくるので、義理丈

けはすむ。

秋の屋||隣保の義これで足る。

東 魚||たつた一つやるわけでもなからうが、一つでも生きても光つて呉れば、良いと云ふ程の心持ちであらう。

(453) 六郷きりて分る相傘

秋の屋||相合傘は男女と相場が極まつてゐるけれども、此句の相傘は男同士で、其一人は別れて吉原へ往くものと思はれる東 魚||「分る」は「わかるる」でなければ、いけないのではないか。或は「わかる」分明する意か。何者だらうと云ふのが分ると云ふやうな意味。但句意は私には分らぬ。

省 二||相傘に河豚を命を雪の朝(龜文)の相傘同様男同士に相違なし、六郷だから川柳の約束で吉原行。「分る」は別るの意。

(454) 中間の名のある甲斐もなし

秋の屋||武家奉公をする仲間は、武士の部に入らぬのであるから、太郎左衛門、次郎右衛門などと云ふ名は有つても、何の甲斐も無いのである。

東 魚||どう云ふ風に呼んだものであらう。其家の通り名をつけられて、呼ばれるのか。謂はば「コリヤ可内」などと。又は單に「小者は居らぬか」なんて、てんで名を呼ばなかつたものか(親のつけてくれた名を呼ばれない方の意かと私は思ふが)

省 二||階級制度が嚴重であつたから。實際の名などとは呼ばれなかつたのである。

(455) 病い程療治盡して捨小舟

秋の屋||病者を治癒するやうに、種々に手を盡して修繕して

も、遂に使用に堪へず、浪のまに／＼漂ふ、捨小舟とされるのである。

東 魚 〓 自分の持つてゐた舟と云ふ愛着の心持が、「病い程」と云つた處に、うかがはれると思ふ。

省 二 〓 漁村生活もした事があるが、漁師には船が大なる財産で、自らも手を下して随分修理する。板一枚下は地獄なのだ舟に執着のあるのは當然。

456) 鳥甲見て歸る弟子入

省 二 〓 舞樂に用ゆる鳥を型どつた冠を、トリカブトといふ弟子入りの日は先づ用具など見せられるのか。

秋の屋 〓 樂人の弟子入と解釋する外に、何か別の解釋が有さうに思はれる。

東 魚 〓 難解―再考するに植物の方であらう。有毒のものである。醫者の弟子入でも申込みに来たものが、門にある鉢の鳥頭をみて、醫者に適はしく思つて歸ると云ふやうな事ではないか。毒のある丈けに又藥の方面に用ゐるのかも知れぬ。

秋の屋 〓 鳥頭(雙蘭菊)は世間に有觸れた植物で、東京の切花屋でも賣つてゐる程であるから、醫師の弟子入に特に夫れを見て歸るは少し理窟に合はぬ。醫藥としては、此根を「雙蘭菊根」と云ひ、昔は「鳥頭、附子」と稱した。當時本草學が流行したから、その弟子入であらう歟。

省 二 〓 軍に來て思ひの外鳥甲(ム四)其他類吟を集めて、後日提案せむ。原句はひねくつた技巧のものでないから、いづれ氷解しよう。ウツ談が出たが、先般讀むだ史劇「西園寺公望」中にも

(光妙寺) 神農も初めはうづに眼を廻しと云ふんだものなあ
(西園寺、中江)(一緒) 何の事ツたい、それは

(光妙寺) 貴公等もなきけなない男だなあ、フランスにあつて平民主義の感化に浴する事數年なのに、平民文學の精華なる川

柳が分らんやうな事ではダメだ、鳥頭とは鳥かぶとと云ふ毒草の事だ。

(西園寺) ああ、京都の家の裏庭にもあつた紫色の花の咲く……

(光妙寺) それ／＼、あれは猛烈な毒草で、とても苦いんだ處が神農のやうな太古の聖賢でも、藥草を制定するに當つては野の艸を一々なめてみて時には、うづの苦さに眼を廻した事さへあると云ふのだ、神農にして然り、況んや……

(457) 戀か叶ふと分散に逢

省 二 〓 精神上及物質上の満足が都合よく均衡を保つてゆく事は甚だ稀だ。戀の叶つた悦の裏には、分散の悲みが回りくる

秋の屋 〓 悲喜交々たる。

(458) 音頭か付て軽い言譯

省 二 〓 傍に口添の音頭取がゐてくれて、切出し好い言譯。秋の屋 〓 何の言譯か判らぬ、音頭がつくも少し腑に落ちない東 魚 〓 旦那から叱られる若い店員達、間へ這入つて取なしの口を切つたのは町内の顔役、お出入の鳶頭といふやうな場合を想像する。

(459) 我からに覗く氣に成藏開き

省 二 〓 年の始の吉日に藏を開いたもの。「つちのとの實入を祝へ藏開き」(立圃)。昔は二十日を以て行つた事もあるが、徳川家の忌日に相當するので、商家は一月十一日に祝ふ。(武家も米藏を開いたものだ)。

東 魚 〓 我が藏を物珍らしく覗く處に穿味がある。

秋の屋 〓 昔の女兒の鞠突唄に、「十一二日は藏開き」とある。省 二 〓 活字本のあるものに、「覗く」が「招く」となつて居るは、原本の見誤り。「藏開き」と原本にはある。

柳人を語る

夏季特輯號の讀物として、著名な川柳家の逸話、奇行、變行、ナンセンス等々々、なるべく興味深き記事を一流の柳人で筆の人達に執筆を煩はしました。(編輯局) ABC 順

散財橋本イズム

麻生路郎

大分以前の事であるが南海沿線鳥取の莊へ松茸狩を兼ねて吟行をしたことがあつた。その時の世話役の總大將が例によつて橋本綠雨君であつた。綠雨君は詩も遊びもすべてが事務で、全く事務の中から生れたやうな男である。幾ら面白い事にブツ突つたところで時間とソロバンを忘れないのが橋本イズム。その點凡俗の企及し得ぬ凄腕をもつてゐる。

鳥取の莊の芳香馥郁たる松茸で十二分に感興をやつた一行も、一歩足を郊外に踏み出すと十四ブンにも十五ブンにも興を趁ふてやまぬ人達である。歸途貝塚遊廓への途中下車説か擡頭し即時可決、あの黒い大門を潜つた。ところが階上に腰を下ろすか下ろさぬうちに舞妓藝妓なん

でもよろしいとばかりに唄ふ舞ふ飲むといふ亂痴氣騒ぎ、このまゝ棄て、置けば根が生えてしまふは必定なりと見てとつた綠雨君。「モウ時間デス」と峻烈な引上命令。「酒は止める、藝者や舞妓はあつちへ行け」とゴー・ストツプの手際の鮮さ。「今、上つたばかりぢやアないか」と目をパチクリさしてゐる一同の手へ、割勘一圓也と書いた句箋が廻はる、コレは又あまりに安い遊興費に一同二度ビツクリで出立。タツタ一圓也の散財はおそらく空前絶後、散財は散財なりといふ遊興哲人紀文大盡今日生きてゐたら涙を流してなげくかも知れぬが、橋本イズムによれば散財も又事務でもあるんであらう

馬場蹄二の

話にしやう

食満南北

馬場蹄二の話にしやう。蹄二が某カフエーへ行くと、あなた飛行家のSでせう」「ウンさうだ」よたな蹄二はさう答へてしまつた。女給のK子は、スツカリ飛行家S君として特別のサービスぶりに蹄二も亦飛行家のそのやうに有頂天になつた。ある日「あしたあんた此邊を飛ぶのでせう」「ウン」「何か合圖出來ない?」「ウン」この上で一廻轉をするぞ」よたもよた蹄二はさう答へた。K子は其時間に一生懸命空を向いてゐた、飛行機は不思議にグルリツと輪を描いた。

慌てぬ花童子君

岸本水府

七八年も前の事か、函館の花童子君が大坂へ来た時、私と一緒にあちこちしてゐるうち、同君は三百圓ほど入つた錢入

を落してしまつた。

「はアにかまひませんの一言。慌てもせずその筋へ届けるでもなく、落ちつき拂つたもの、電報爲替でも取寄せたかそのあぐる日は中座の棧敷に悠然と納まり返つた。

私なら着くなつて早々大阪を引上げてゐたであらう。

自動車代十圓也

木村半文錢

酔つ拂つた日車が、新世界から自動車を飛ばせて烏ヶ辻へ歸つた。所が一圓の自動車賃がない。十圓出して剩餘をくろと言つても運轉手に持ち合はせがない夜は二時を過ぎて金を換える家も起きてゐず、なまじに吾家を叩き起こして、妻君の逆鱗に觸るるのも何とやら——

そこで日車一流の氣前のよき、十圓をくれてやつて運轉手の恐縮と呆れ返つてゐるのを尻眼に、吾家へ歸つた

その翌夜、日車と私とが亦飲んでゐた

併し、今夜は二人の懷中合せて三圓足らず、迎も酔ふほど飲めさうな筈がない。

日車しきりに嘆じて曰く

「昨夜のツリが惜しい。」

川村花菱さん

窪田銀波樓

「川柳雜誌」の客員たる川村花菱さんは劇作家として餘りに有名になつたので、柳人の影が薄らいで行くやうです。然もたま、金澤へ見える時など、いつも柳人を集めて柳談の花を咲かして樂む人で

す。
その脚本にもとき／＼川柳を挟むことを忘れぬ劇作家であり柳人であります、二階で川柳の會をやりながら、階下では子供の病氣に氣をもむといふ場景を描いた「友達と醫者」といふ一幕物もあります、柳人でなければ出来ない藝です。私の娘が東京へ嫁ぎゆく時、祝句を戴いたことも忘れることが出来ません。

誰に許す女なるらむ美しき

花菱さんは矢つ張り劇作家としてばかり

でなく、柳人としても忘れてはならない人です。

暮 口 無 事

小林不浪人

三年ばかり前のこと、海峽親善川柳大會へ谷孫六の矢野錦浪さんと川上三太郎さんが連立つてやつて來たことがありました。

青森へ着くと、三太郎さん、すかさず「アヲモリツクガマガチブジ」と云ふ電信を東京の留守宅へ打つたのであります。

何んのことかと訊くと、東京を出立する時、上野驛であわてゝ蒸口をなくした騒ぎを演じたが、タクシーの中に落つことしたのが判つて、見送りの妻君にハラ／＼さしたからであると云ふことだったのであります。

それで、ガマガチブジの故事來歴謂はれ内縁が判明しましたが、其の晩、經濟協會の講演會へ臨んで谷孫六の前座を仕つた時の眞面目くさつた顔を思ひ出すと今でも可笑しくなります。

金短冊異變

森 雞牛子

僕が今もつて黙つてゐるが氣の毒な事は、昨年の春、關東川柳團に参加して西下された久良伎翁が、獨り残つて寶塚、神戸に遊び、再び松の座旅館へ戻つて一泊、翌朝法隆寺奈良を経て歸らるゝとの事に、私は丁度王寺の地にり工事で徒歩連絡となつてゐるので湊町からはお止めしたが、翁は元氣にそんなもの位歩くとの事に、それでは山雨樓さんに列車中のこと、徒歩連絡等につき、御便宜を得たいと懇請した。氏はニコ／＼喜んで専務車掌に其點を依頼して下さつた、そして私と氏の見送りをうけて發車したが途中法隆寺、奈良、龜山、其他で頗る町寧なサービスに翁も不自由な獨り旅を愉快に歸京せられた。

その事が例の感激性の翁を極度にうれしがらせたものだから、たまらない、早速金短冊や色紙半折に雄渾な筆を揮つて送られた。所が當の揮毫は一點も山雨樓

氏へ届かず、何かの間違ひか、但しは矢張り同姓の福田氏の誤りか一向氏にはわたらず他の人が受取つてゐると云ふ珍現象だつたさうだ、元よりそんなことに彼は云はるゝやうな山雨樓氏でないから私も知らう筈がない、いつか梅田新道で縁雨氏から聞いてまことにすまぬやうな心持で今日まで山雨樓さんに黙つてゐるが久良伎翁の性格と山雨樓氏の人格がとう／＼金短冊其他を他へ奪はれた恰好になつてゐる譯だ——これは面白い事でないが、何か川柳家の持つ或物を見せてゐるやうに思はれるので一寸書いて見た

震度をばかる顔

海野夢一佛

雉子は地震を豫知して啼くといふ。例の關東大震災の後、巢鴨の矢野銀浪氏の避難所の大きな爐を圍んで、連日連夜柳談を聞はす面々は、劍珍坊、三太郎、珍茶坊、迷亭、雉子郎こと今は大衆作家の雄吉川英治の諸氏等と私——或る日——可成り激しい地震！

と見ると、英治氏の顔半面、鼻まで眞つ青啼かぬ雉子は顔で震度をばかる。

一夕昔前の

三太郎氏

安川久流美

「私に柳人を語れと言へは矢張り金澤の地をはじめ踏んだ人を語りたい、それは東都の川上三太郎氏である。あのトボけたやうな顔して北都川柳社（西町の家）を訪ねてくれたのは寒い冬だつた。「礎」の十號かを發行した頃から大正三年頃だつたらう。二階の居間へ招じて、折柄來合せた同人夕星君を紹介したが、夕星君何と思つたが三太郎氏のトボけた顔を見て辭し去つた。朝だつたので酒も勧めず、餅を焼いて出したら「ムラサキがほしい」といふ注文、仰せのまゝ砂糖をぬきに醬油を添へるとおいしさうに喰べられた。その時から既う一寸風變りの柳人だと思つてゐるが、其翌日彼氏の宿榮町の不二館（今は焼失してなし）を訪れる

(七月十七日稿)

珍馬氏・猫丸さん

のこいども

米村 あん馬

その頃の村穂珍馬氏は若かつた。村穂氏は山陰道川柳開拓恩人——一管の繪筆を提げて某學校の圖書の講師たる閑散な職務から一躍新聞記者となつた時だからやゝ得意の時代だつた。従つて従來の下宿を引き拂つて、所も繁華な町の下宿に移轉してその二階に納まつたものだつた。所でこの頃氏を中心として「亂坊會」と號する川柳會を開催して仲々盛んに會員も十名に近くいづれも熱心な若人達の集ひで私もその一人であつた。

珍馬さん(その頃は毛珍坊と號した)が轉宿の披露をかねて例會をうちでやるから舉つて來いと案内!それにその下宿に十八九歳の可愛い娘さんがゐると云ふので早くも亂坊會同人から美望の種とも

と、別に荷物とてななし、マントを衣桁にかけて數冊の本あり、床に靜岡のわさび漬と福井の雲丹などの手をつけたのがある。上戸であることは誰しもうなづかれる。▲それに初対面早々餅をすゝめた久

流美は人相を見る事下手であると後悔しても詮方なし、その後柳會にあひ、森田一二君を紹介し、同君とは酒に共鳴、一しよにバーやカフェーをのみ廻つたこともある。暫くして一度金澤を飄然と消えた三太郎氏、再び金澤に舞戻つたのは、もう櫻の散る頃だつたか、今度は例の不二館には泊らず、一二君にも私にも居所を知らさなかつた。偶々柳會に出席しても歸りは、いつも淺の川の大橋邊で姿を消して行方不明、ある夜森田君と二人彼氏を尾行して、その寢所をつきとめやうとまで相談したが、それきりになつた。とに角淺の川に向ふの木賃宿か、夢香山麓の何所かに巢喰つてゐる事丈だけは確かであつた。「謎の男」としてあえて無理に彼氏の宿を知らうともしなかつたが、晝になると惘然又トボケたやうな顔を現す。夏のある日だつた、旅から歸つたや

うな浴衣姿でふらり訪ねて來た事がある。「何處へ行つてゐたのや」といへば「ウン七尾へ日本海を見に行つて來た!」

とすましたもの、いふことが奇抜だ。

十返舎一九の「膝栗毛」大冊は川柳誌をぶらりと提げて、之から大阪へ行くとお別れの挨拶に來たのはそれから數日後であつた。本を賣りたいから古木屋を紹介してくれといふのであつたが、それを紹介したかどうか當時をはつきり記憶がない。その夜酔つばらつて私や森田君が常連で行く「北國バー」へ姿を現し送別の宴を開いたかと思ふ。斯ういふあんばいで三太郎氏金澤滞在中は奇行、蠻行ナンセンス澤山だつた筈で、その頃氣の小さい私等は多少敬遠主義を取つてゐたものである。さて三太郎氏どうした事か懷ろをぬくめて北陸を去つたあとの噂では當地の東邸にすばらしい愛人がゐたので衣食住にも困らなかつたらしい。今も三太郎氏に遇ひ、この話を持ちかけると都度、疣のある耳を撫で、「桑原々々」と申す。北陸は爾來雷が名物です。

なつてゐたこととて當夜は全員出席の盛會。課題は「娘」「下宿」といふようなものが採られた事勿論でいよく披講となつたら随分珍馬さんを彌次つたり娘さんにからかつた句が多く流石の珍馬さんも少々閉口頓首の體、處でその間同人の誰彼は用もないのに殊更などうかかと云つては下の室へ降りて……二階の騒ぎをひそかに聞いてはゝえんでゐる娘さんに「おべをこれへ入れて下さい」「おひやを一杯願ひます」娘さんの動靜を満座へ報告して有頂天に喜びあつた——古い話ではあるが今に我黨の面々の印象にの

川柳ハイロツト欄新設

〓九月號より發表〓

擔當・山雨樓

初心者指導は本誌創刊以來の使命であります。従つて路郎主幹を初め、各同人社友に於ても此の精神を以つて直接間接川柳入門者の手引に努めて参つたのであります。

今回更に此の精神を一層徹底せしむる爲め下記の方法に依り、作句の添削及概評を加へる事と致します。齎つて御利用下さい。

こる山陰柳界の恩人村穂珍馬氏の生活の花やかにもおかしかつた一斷面はこれ！

△

井上劍花坊氏が往年水郷松江に遊ばれた折歡迎大會の席上に姿をあらはした唯一の女流川柳人は下村猫丸さんだつた。とつて七十餘の猫丸さんに對し氏は深く禮讃の言葉を送られたと共に江戸で生れた猫丸さんであるが故に話は遠く昔の東京に及んで劍氏の感慨も一入こまやかなものだつた。そうした猫丸さんは今や八十一歳の壽を迎へていとも元氣に尙川柳研究と創作をつゞけ地方柳界の爲めに激

勵と發奮を興へて居られる。天下に女流柳人今やいよく多しと雖どもわが猫丸さんの如き高齡にしてしかも尙克く精進をつゞけつゝある女性川柳家は全國にその比を見ないであらう。宍道湖は湖都松江の誇り猫丸さんは又松江柳界の異彩！

△

猫丸さんは居常猫を愛し若い昔から今日まで渝ることなく現に今も數疋の雄猫雌猫を愛育してさながら子や孫でもかはゆがるのと異らない——自ら「猫丸」と號して猫をはぐくむやさしい心榮えは誠にゆかしさの極みだ。

〓本欄の利用は初心者に限る

〓毎月課題を變更すべきに付、少くとも一題十句以上を作り、其中より最も自信のある一句を提出すること。

〓用紙 ハガキ

〓宛名 大阪市浪速區湊町保線事務所 福田山雨樓宛
とし「入門川柳」と標記のこと。

〓メ切 毎月末日

〓八月末メ切の課題 「夏休み」

粒々集

御影 長崎 柳秀

心中のどちらも繼子育ちなり
死ぬ方がましたと愚痴る保険料
たよられて見れば女は乙なもの
事毎に意見を出して疎まれる
冷房の設備を氣附く扉の重さ
一坪のおらが庭にも夏の色
パイブルにかこつけてする戀も有り
洋家具部こゝは子供の遊び所
露次多き町に儲ける紙芝居
ちいさんの婆さんなど仲の好さ
血汐まで同じ型よと嬉しさう
マルクスだ酒だ女と子を案じ
東京 富士野鞍馬
梅幸の舞臺の足に見るよこれ
小半時行方不明の女事務
今年の帽子がぬれる五月雨
東劇律子の道成寺
後見はあほほぎたい程汗を見る
東劇律子のお里
眼が開いてからはつまらぬ二人なり

謹告

故近藤鈴ン坊の墳墓は親しき友人中で建てれば可いのですが、川柳會の皆様の御芳志を積み上げたらといふ意見も出ました。左の規定で皆様の御賛成を御願ひしたいと存じます。

昭和八年六月

發起人(イロハ順)

- 規
一口 金五十錢
口數の制限をせず
送金先
東京市四ツ谷區寺町六
西島 義豐 宛
(○丸)
振替口座東京六三〇八一番
郵送代用二錢以下
〆切 八月末日
御芳名はむさしの誌上發表
- | | |
|--------|--------|
| 井上 劍花坊 | 藤本 福造 |
| 大谷 五花村 | 小林 不浪人 |
| 大村 新蟬 | 榎田 珍竹林 |
| 川上 三太郎 | 寺井 紅太郎 |
| 金子 金比古 | 麻生 路郎 |
| 龜井 花童子 | 阪井 久良伎 |
| 高木 角戀坊 | 岸本 水府 |
| 田沼 瀧の人 | 柴田 五萬石 |
| 中島 紫痴郎 | 森 鷄牛子 |
| 村田 周魚 | 關口 文象 |
| 前田 雀郎 | 梶元 紋太 |
| 食満 南北 | |

本社八月例会

「日本名所名物川柳」。佳句は畫家に依頼して「川柳漫畫」として發表致します。

日時 八月六日(日)午後七時

會場 道頓堀俱樂部 (大阪市南區日本橋南詰東入南側)
電話南二七四八番

兼題 「四天王寺」三句 麻生路郎選

會費 金三十錢



(御渡船の祭神天) 乗子梯の船衛殿

日本名所名物川柳

大阪之巻

麻生路郎選

大西長三郎畫

日本の名所名物を川柳で短じたいと思ひ、その第一着手として手近として手近な大阪の巻を約一ヶ年計畫で發表することにした。(略)

(二) 大阪の夏祭

木津八阪神社

枕太鼓本津できたへた聲と腕 翠
 カフエーとは別なあかりの夏祭 三
 配達がきよふ大阪の夏祭 三
 夏祭ですと車窓をあげたきり 三
 御渡りがすむと人出の愚癖がい 同
 夏祭裸になれと裸言ひ 柳
 次

大阪の祭 西瓜の値をあげる
 夜市から住吉祭の人となり
 そない押ししないなと渡御を橋で待ち
 宵宮の雑沓トーサンを見失ひ
 算盤へ指落付かぬ夏祭
 はぐれたを笑ふ天神祭なり
 夏瘦へ今日は祭の膳の色
 祭り月二十五日に又休み
 末つ子は寝冷えしてゐる夏祭
 御神燈船場も今年無事に住み
 御渡御の去年もこゝで雨になり
 夏祭内も向ひも將棋盤
 御渡りの通る時分を地下で抜け
 お向ひは汗大阪の夏祭
 瀬戸物の着物を着てる夏祭
 喧嘩ではないお渡りが無事にすみ
 孝心に陶器まつりを誘はれる
 中之島ジヨツキを持てば祭の灯

變人 夕鐘 山雨樓 夢裡 紫石 變人 柳次 禿山 柳次 住峯 冬光 柳次 蘭水 禿山 住峯 海洋人 春光 文蝶

夏祭大阪城が浮いて見へ 鮎美
 結局は暑いが天神祭なる 氷炭
 御渡りの神主ビルをふと見上げ えいを
 船渡御へ中央市場幕を張り 紅
 夏祭川から見れば裸で居 山雨樓
 お渡りへ冷やかすぎるビルの窓 八歩



鷹治郎鼻のあたりに祭の灯 鮎美



川柳塔

路郎選

福田山雨樓

妻の長襦袢の柄もう古し
ポーナスへあまりに亭主らしくされ
弱き意思をまろめて蚊帳に潜りぬ
五六人泊り課長のあらを云ひ
妻の疲れを拜みたく寝静まり
よく泣くと父親に云はれる女の子
地下鐵の穴から出前持が出る
馬子の綱長く馬の首長く午後

吉田水車

つくらなければべつびんだのに
ケイブルへ山道さへもさびれたる
何だ活動で疲れた話か
吳所見
朦朧もねむたさうなり夏の海
道づれの呉れたみかんを持て餘し
あきらめて歩く眞夏の己が影
甘酒の湯氣に尊し紀三井寺

關本雅幽

働いた日のあぐらが簾に見ゆる
眞直ぐに従ってくるのは風ばかり

此の腕を馬鹿にしてゐる起重機か
いつ見ても淋しき髯の巡査なり

祖母の米壽

八十八聞きたいだけの慾となり

のぶを君病む

夕風吹かば僕が祈りと思へかし

橋本 緑 雨

こゝへ来て見よお玉杓子はこんなもの
草取りに影を並べて汗を拭き
鮎鹽に一週忌とは淋しいね
うごかないパスの中なるバスガール
鉢植の朝顔持つて暑氣みまひ

朝田 新水

用箆筒醫者の書付だけ残り
燒跡の畫親類の女も來
生欠伸朝風呂よりも寝てゐたし
カーテンの畫丹念に初着縫ふ

結び立てが戻れば朝の陽に匂ひ

西田 艸 樂

借りに來たと早速顔を讀まれたり
腕組めば言はぬがましの氣にもなり
決心のたよりないもの春の宵
並ぶ肩月夜の影の濃ゆすぎる

松丘 町 二

夏季掃除疊を叩く音さびし
砂踏んで海の愁ひの足となる
いとしさを寝た子の眉の毛をさすり
心むなしく腕くみるたり深き晝

岩崎 柳 路

妻のエロでははじまらぬアツバツバ
女教員ヒステルカルに折るチヨーク
異人の兒ラムネのむ様な目で笑ひ

阿部 閑生

債權者共は去んだか冷奴
出這入りのない工場の門となり
週末の歸り市場へ廻らされ

松 盛 琴 人

あいつが、こいつが、君が、僕がと御多忙だ
挨拶をおしと云はれる娘の背だけ
共稼ぎ雨の用意もして出かけ

姫 田 夕 鐘

三枚目まるい台詞がのこるなり
七、八、九、ことさらにブルの夏となり
はさみたる箸から逃げる病上り
痩せてゐても暑いかと問はれ
夜會服腕から風邪をひきさうな
もつばらのうわさのとほり女住み
溜息がストロアの泡と消ゆるなり
お座敷へ五月の風を入れて飲み

思ひやり故人となつて見付出し

水 谷 鮎 美

梳櫛の妻の手垢にすべるなり
想ひ出はアルファベットの君なりし
おしろいの汗のうへなる金策や
子がつミカン水をのみすぎた
五色豆妓におもしろいいろいろばかり
帯芯はよれよれ女ごゝろかも
山の青さの生活線を越へてゐる

西 村 明 珠

三度三度時計に支配されてゐる
算盤をおけば食へないものばかり
朝顔をのばした丈けの避暑でした
蚊帳釣つて寝た夜の夢は圓ろかつた
母親になり切つた手に蠅叩き
カード式などと勉強慾を持ち
汗出して大邸宅の前を過ぎ

日野華水

捨てられたカンカン帽踏んで見たし
澄み切つた小川へ二人しやがんで居
バスガールお二人ですかと如才なし
最後まで残ると工場音がなし
廣告に僕もやつたと附け加へ

松下小柳子

雨晴れて月凱旋の如く出る
蟹よ蟹お前も月が好きなのか
兒を抱いて夕立晴れた河に立ち
空に雲なく晝の月にも似たる我
貧しき兒の如くにのびし屋根の草

楊井二南

懐ろ手しても儲かるのは儲け
年のこと云へば受付腹を立て

松竹レヒナー團爭議(三首)

僧坊にダンスの足を投げ出され

踊り子の眉を忘れる日が續き
食うて寝て爭議は旅にゐる氣持

大西八歩

打水は後追ひかける様に打ち
個人主義海の廣さへはちよかし
だしぬけにいゝお天氣へ泣く白痴
特等の切符持つてる靴の音
いゝ部屋は貸して淋しい旅館の子

喜多春秋

世はテクノクラシー母の針仕事
登校に誘はなくなり女學生
云ひわけの云ひわけをして借るのなり
貧遂に今は悪事の隣にゐる

竹内機見女

アイロンのさめゆく音の夏ざしき
掌型うつりし夜の机のいとしけれ

神經質な苗に夕べの心となる
無形の愛を形でかへすさみしき

首藤 竹楓

洋装を見送る目なり涼み臺
スタンドを消せば夜霧は流れ込み
制服の守衛の肩にある夕陽

江戸みつる

藤田紫石氏の轉居を祝して

移り來し家は吉日待つばかり

奉天にて

大阪がやつぱり好いと女云ひ

滿洲に住めば

六月の暑さを云うて笑はれる

河合 紫石

味の素毒藥ほどに妻は入れ
母親も怒つた顔で云ひきかし
これからが娘の稼ぐ夜になり

熊谷 紅

かつがれた嘘が涼しいバルコニー
決着がついてお燗のつかり頃
金貸して欲しい紅茶をかき廻し

谷 心府

判つかぬ親戚口を出したが
此の身體どこを押したら笑へやう
今日も亦夜業かこれが青春か

奈良井 柳人

金のこと気にせず飲んで見たいなり
豫算には夏の戀など入れてゐず
夜だけの國へ行きたい風が吹く

平岩 司郎

夏が來た硝子の向ふの雲を呼ぶ
かげり行く川少年の氣を變へる
花束ばかり持ちなれた指笑くば

石曾根民郎

單調をかこつ暇なく寝むたがり
偉すぎる弱すぎるその板挟み
硝子張りのなかで埋れむ身をなだめ

石森 静太

岡野露洲を悼む

塵箱に川柳雜誌すてゝあり

病床吟(三ウ)

かさみゆくカルテに蟬がないてゐる
松の緑の病院にゐる

市場没食子

服装が其の後の彼を物語り
あゝ夢でよかつた妻も子も寝てる

尼 緑之助

山も海も俺のものではなかりさう
官能はせめて自由な夏とせむ

奥野 禿山

病床へ見舞つた後の氣の輕さ
半額祭妻切り取つてためるなり

岸上 錦石

門衛の詰所は夏にくづれかけ

歸宅途上

道の蟹取る父の幸福

水田 光哉

變屈の顔のまともに陽があつた
あれでやう食へてゆけるよ尾上茶屋

妹尾 變人

サーピスのながい袂が引つかゝり
冷蔵庫子にのこしとくものを入れ

宮岡 白峯

トンボこつちへよれと伸びてゐる

卓 上 句 評

福田山雨樓
松丘町 二

眼 心 臟、臍

山 雨 樓

毎月十數冊の柳誌を讀んでゐるが、その創作の全部に對して眼を通すことは思つてゐても仲々出來ない。すつと一通り句を誦して 佳句と思つた句へ印をつける位のこと、は、雜誌を受取つてその新鮮な觸感が薄れぬ間に是非やつておきたいことだと常に念じてゐるのであるが、各雜誌の發行が大抵一時になるのだから押され氣味でつひ次の誌へ浮氣をする場合が多い。けれども「川柳雜誌」の創作陣だけは必ず前に云つた念願を果してゐるつもりだ。

七月號の「近作柳樽」及「川柳塔」から印をつけた句約五十句を拾つて、靜かに味はつてゐると、句の體系から凡そ三つの分類を思ひついた。即ち眼の句、心

臟の句及臍の句である。

眼の句と云ふのは、所謂第三の眼をよく働かして生れた句、聊か冷靜な傍觀的態度から捉え來つた客觀的素材の句。心臟の句と云ふのは飽くまで主觀に徹した句、自分の心境をそのまま訴へた句。臍の句は、前兩者の何れかに當嵌らぬことはないが、一言に云へば凡人凡情をよく活かした句、人間味の横溢した臍のあたりをゆるがすやうな句、と云ふ意味である。この分類が果して正鵠を得てゐるかどうかはわからぬが、句主の川柳に對する角度を打診する場合多少の參考になりはせぬかと思ふ。

(1) 風呂敷に、この暮もよがつき
(2) 公園のベンチの端へ待つて、紫陽

(3) 泣いてゐるはサーカスの馬知らず 月茶
(4) 生か死が大書院の壁時計 角丸
(5) 生活苦教へる機は兇器染み 錦石

以上五句共第三の眼が夫れ／＼に活躍し指差してゐる。(1)の句はよごれた臭ひもするであらう一枚の風呂敷を捉え來つて、手狭ながや／＼した家庭の暮し向きを素知らぬ顔で紹介に及んでゐる。老巧な手法である。(2)は自分がベンチへ腰をかけるのではない。これも第三の眼で、やつれた孤獨者の姿をその心持ちに迄突入つて眺めたのである。この作者の二句は光つてゐる。(3)この句は表現そのものが白々しい冷酷さを示してゐるやうであるが、それが知つて効果を收めてゐるのであつて、蔭にゐる少女の姿にはろりとさされる。(4)は血の通つてゐないやうなつめた句であるが、不安と憔悴の中に絶望か光明かの最後の一言を

勝 二
紫 陽

期待するおのゝきをばらませてゐる。水は冷たいほど堅いやうに、こう云ふ句は冷徹なほど光る。(5)の句は見方が稍誇張を示した感もあるが、作者の眼即ち川柳を撮す鏡は、如何にも凄い。鋭く見据えてゐる。

故郷を憶ひて

(1) 桑の實が熟す黒き吐息なま村や 松雨
(2) 子の寝息サンドウキツチの句な草吉
(3) からだまぐればかままの影な噴兒
(4) 氣弱さの心を叱るインキ壺 紅
(5) 今は去りゆきし君思ふ掌の 靜太

右の五句は心臓の句と見る。何れも句主の誠實な息遣ひが迫ってくる。(1)數年前の本誌月評にあつた重陽子氏の句「親類はかなし青々とある蜜柑の木」を思ひ合はした。共に藝術的香りの高い句である。桑の實の熟す頃の故郷を追想して病床と斷ち切れぬ句主の感傷が、夕べの葱の匂ひのやうに滲んでゐる。「黒き吐息」は熟した桑の實を食べて、食べ飽いてその吐息も桑の實のやうにうす黒く染るであらうとの意に解する。(2)乳臭い幼児を想はしむる。しかしこの句は單に

比喩を取立てゝゐるのではない。親としての至情が溢れてゐる點が、直ちにわれわれの心臓にまだ感じられるのだ。(3)この句に説明ケ間敷言葉添へることは忍びない。恐らく作者に會つても慰めの言葉はさうたやすく出まいと思ふ。只眼が物を言ふだけであらう。だが、句主が此處まで深刻に詠んだ心境から見、川柳に眞に生きる道を見出してゐるものと信ずる。(4)僕も僕のインキ壺に度々叱られてゐる。この句は他所々々しく詠つてあるので迫力は稍弱いが、しつかり物が擱まれてゐると思ふ。(5)近頃靜太君のやうな純な青年を餘り知らない。この句にしたところで靜太君そのものゝ一色刷である。生粹の純情の句である。まざりけがちつともない。それでゐて句が張り切つてゐる。

(1) 叱られて臘月夜のかごに居る 黒天子
(2) 物言も客へ女給のコンバクト三 江
(3) 案外に獸醫は小カパンで來 翠句樓
(4) 大掃除疊と箆筒丈けの事明 珠
(5) 拶挨のやうに同情してくれる 春秋

以上膾の句の部類に屬する。これ等の

句は一々句意を説明したり、叙法を述べたりする迄もなく既に明瞭である。疑ひもなく凡人凡情の境地である。けれどもよく味はつて見ると、單なる世間話を聞くやうな凡情さだけではなくて、人間味と云ふものがしつかり擱まれてゐることが見逃がせない。凡人が感ずるさゝやかな感傷、驚き、妬み、覺り、皮肉などが憶面もなく句の上を這ひ廻つてゐる。どの句に向ひ合つて見てもすぐ手を握り合ひたいやうな人間的親しみを覺える。しかもさうした中に一脈のユーモア線が覆ふことの出来ない反撥性を見せてゐる。

曾我廻家五郎は曾て「私は膾です。膾なんて有つても無くても差支へないが、邪魔にならず、あるが故にかへつて妙味を添へることもある。五郎劇は社會における膾である。膾の役割を受持つのが、五郎劇である——と、まあかう思つてゐます。」と語つてゐるが、川柳に於ける膾の句も亦擱すべき妙味波めども盡きずである。特にそれが優れた膾の句において。

句を賞

町

二

看護婦の瀑布も春の憂鬱だ 松雨
七月號の近作柳樽欄を通讀して、佳句の少なさに失望した私は、やはり巻頭第一番目のこの句を先づ取り上げることにした。春の憂鬱——それは健康な人間にとつても、病婦の人にとつても、數多いのであるが、看護婦の瀑布した姿も亦餘り朗らかなものではない。ざつくばらんな表現法で、精緻でも繊細でもないが、それだけずばりと云つてのけた確かさがある。

背なの子もしつかり掴む暗い道 大門
心理描寫といつては大袈裟すぎて、この句に迷惑だらうが、かうした着想は決して凡手ではなく、今月の發表句中、川柳らしい川柳としての的確さを備へてゐる點で、この句は首位を争ふものと思はれる。川柳作家は必ずしも鋭さのみを覗ふのが能ではなく、鋸の目立のやうなりズムを愛するのが必ずしも新銳詩人とし

ての特權ではないので、まだこの句の持つが如き境地に、新しい發見がある筈である。私などいつのまにか先走つた積りで、主觀的色彩の濃い強烈な句を好むやうになり、かうした方面への凝視を怠り、従て徒らに灰汁の強い句に終始してゐるさらひがあるが、眞に古川柳の精神を新時代的に生かす道は、この句が一つの提示を見せてゐると思ふ。たゞ強いて云ふならばその發想法が、傳統川柳的であつて、新しさに乏しいといふ不滿があるが、佳句であることに間違ひはない

すがる事捨て、淋しき酒に痴れ 萬次
作者が若し短歌形式を借りたならば、一層この氣持は生々と表現出來たゞらうと思ふ。といつて川柳形式が短歌形式より劣つてるといふのでは決してなく、この句の場合についてふとさう考へたのであるが、生活感情のうちには、たとへば短歌でなければ云へず、俳句や川柳にちゞめることの出來ない感情、之と反對に俳句か川柳でなければ適切に表せず、短歌にまで擴げることの出來ない感情等色々あるが、この句の場合、川柳では一つの筋書を述べるだけで十七音字が費されてしまつて、作者の感情の表現される餘地がない、三十一音字に於て始めて「する事を捨て、」淋しい酒に酔ひ痴れる」といふ感情が詩として表現され得ると思へるのである。多くの川柳が筋書を述べるに止つて、作者の感情の表白を少しも見せないで怪しまぬのは、川柳が詩であるより前に、何よりも川柳でなければならぬといふ既成觀念がせつかに働いて、素材の燃焼を怠り、燃焼の晶化を等閑に附するからである。前の松雨氏の句でも、大門氏の句でも之れが佳作であるのは短歌に作りかへることも俳句にすることも出來ない、云はゞ川柳としてのみ許される抜きさしならぬ定着を見せてゐるからであるが、この句に就て、前述の難色のあるのは、それだけ素材の消化と燃焼が足らぬことを意味する。悪い句ではない。否今月の發表句中では上の部で

あるが、敢て苦言を呈しておきたい。

生か死か大審院の壁時計 角丸

觀念の所産であるが句柄が應揚である
讀む者をひとと捉へて離さぬといつた力
はないが、壁にかゝつた大時計の深刻な
針の動きは見える。

現實はけむりのかすのころ雲 鮎美

川柳塔で同人の目ぼしい句には選者の
短評があるのでわざと觸れないで、先づ
この句を眺める。これは難解である。とい
ふ意味は言葉と言葉の繋りを、数字的に
はつきり説明がしにくいといふのである
觀念の所産らしくて觀念的抽象感がなく
「現實はなど」概念的な言葉をそのまゝ
使つて、しかもびたりと動かぬところ、
作者の豊富な詩的資質を遺憾なく示して
ゐて敬服に堪えない。こゝには既に古
川柳並にその傳統の俗っぽい匂ひは跡方
もなく、新興川柳と稱するものゝ噴燥さ
もない。在るものは煤煙の殘滓を孕んで
汚れた雲と——この雲こそは資本主義社
會が生んだ現實の象徴なのだ——作
者の鋭い眼とである。かうした句を讀む

ときに、私は川柳作家を祝福し、川柳の

ために喜ばずにはゐられない。僅かの機
智や穿ちや發見や、そして品格の低い凡
百の川柳が、どんな讃辭を浴びて賑々し
く登場したところで、紙と印刷の安い我
國の出版界を慶賀するに止るが、かうし
た一句を讀み味ふ喜びは大きく且深い。

年頃のわれにまばたく人も來む 民 耶

戀するものは、僅か睫毛一本の動きに
も心を顫はすと云ふ。心憎いまでに冴え
た作者の技巧をみよ。川郎氏はいつも發
表する句數は少いが、句は常に好い意味
で一癖あり、個性的で光つてゐる。

それまずに嫁入りの荷を見^るなり。 明 珠

親と子と居れば短かき日なり。 變 人

うなされるベツトを覗く 稻光 紅

春の小川に淋しき心流し居る 小柳子

とかげが美しい僕の戀です 靜 太

右の諸句が目についた。表現に古句及
びその亞流の俗臭がなく、といつて既成
作家の多くが殊更に厭ふかに見える俳臭
も殆ど感じられない。近頃の俳句は自由

律のものは勿論、定型句でも人事關係の

句はその素材の扱ひ方が著しく川柳に近
いものが多い。たゞ相違を云へば、流石
に俳句としての氣品を貴んでその表現が
卑しくないといふ點にあり、この相違こ
そは川柳と俳句との詩壇に於ける藝術的
地位の相違をなすものである。川柳が俳
句に近づき、俳句に混同しきつて仕舞ふ
ことの可否は、多くの議論のある所だら
うが、もとゞ川柳とは俳句の出來損ひ
なのである。未だ俳諧と稱した武玉川に
してもそれから起つた誹風柳樽にしても
、俳句の傍流であつて、云はゞ俳句の出
來損ひであるのだ。勿論出來損ひとはい
へ出來損ひならでは持ち得ない好い點は
持つてゐる。その好い點を藝術的詩とし

て生かさうと思へば、勢ひ俳句のそれに
一脈通つてくることは仕方のないことだ
とも云へる。古句にしても、當代の亞流
川柳にしても、出來損ひの悪い點のみを
強調し表現してきたのだ。悲しいことに
は、それが亦川柳の川柳たる唯一の特色
とされてゐるのではあるが。

花形十題

金貨

楊井二南

これ小判たつた一晩みてくれろ

馬鹿にしみつれた句ちやねえか。憚りながら俺なんざあ、あの山吹色てえやつにはあきく／＼してゐるんだ。千兩箱の十や二十並べられたつてびくつともするもんちやねえ。俺の話は少々でつけえかも知れねえが正真正銘金輪際嘘や夢ちやねえんだから途中で「野郎！いゝ加減な法螺を吹くな」なんて云ひつこなしに最後まで神妙に聞いて貰はうぜ。

二十圓金貨のギラつくやつをわし掴みにして放り込んだ木箱が十個、一個の中には大枚四萬圓と云ふから皆んなで四十萬圓だこいつを銀行の大金庫からひきづり出してトラツクに積み込んで神戸まで突走るのが俺の仕事なんだ近來にねえうめえ大仕事さ。だが思へば危ねえことこ

の上なしさ、まかり違へばこの首がすつ飛んちまふと云ふ、思ひ出してもぞつとする藝當だつたよ。とかく市中は人目が立つてうるせえし下手あすると正体がばれるてえんで、トラツクの上ちや立つたり坐つたり四邊に氣を配るのに疲れたもんだが、阪神國道のスムーズな大通に出た頃は、すつかり度胸もきまつてゐたよその證據に俺あぼつ／＼鼻唄を始めてゐたからな。何しろ大枚四十萬圓と道行だ金貨四萬圓入の箱に尻を据えて國道をドライブするなんて恐らく天下に俺ぐらひなもんだらうぜ。

こんな話をしたからつて俺をギヤングだなんて早合點しちやいけねえぜ。安心しねえ、俺は只の銀行員なんだ、そしてこりや三年前の話なんだぜ。それ、……金解祭のお觸れが出た時よ。神戸の突堤からどん／＼金貨を輸出したもんだ。その金貨運搬道中の警護役を俺が引受けたつて話だ。これが去年や今年ならそんなよそこらのギヤング連が黙つちやいめえ忽ちパチンコの二つや三つ、胸板を見舞

つてゐたかも知れねえ。

兎に角金貨には因縁淺からぬ俺の思ひ出話をしたまでさ。

盗人

水谷鮎美

吾影をふんで歩きつゞける仲天には十六夜の月がくつきりうかんてゐるいゝ月だなあ、千船大橋から見へる島影、波はひかりて月にさゝやく夜鴉の空をゆく頬をかすめる微風これは詩集の一頁だ大またに歩きつゞける。

吾家のまへに立つた小生の眼前に現實は曲つてゐる——警官、お向の人、蒼白の妻——すですすでに真夜中の殺風景ではある。

——盜難——ねこそぎにもつてゆかれたんです。被害の嵩は小生にとつてはかなり大きいものでした。蚊帳にはいつて川の字に寝たのですが、まぼろしのシャロツクホルムズよまぼろしのジゴマよ、人生のコメデイアンおどろろぼーさんよ、奴さんでも連れ舞ふではないかね、こんな

氣持でおくりたい。

裏のへちまはなんのへちまと若わかし
い憂をぐんぐんのばしてゐる (八、六
八午前一時半しるす)

まるきこころにたんすからなる
夜風身にしみ闇につゞけり
子を抱いて近所廻りに苦笑ひ
おちついたこころのそをぞ
妻呼んで朝のけむりにおちつこう

獨身

生田翠夢

州を越えて利身でゐる事は男にも女に
もどうも世間的でないらしいです。ね。
そもくですなあ、友達と別れて歸へ
らうとすると、それが晝であらうと夜中
であらうと

「まつすぐ早く返へれよ」と云ふです

最近久し振りであ友達は

「おい、もう貰らつたかい」勿論女房
です

「どうだいもう二世が出来たかい」

「いや未だだ」

と云ふときまつた様に

「い、加減早く貰らへよ」

と皆口を揃えて忠言してくれる、どう
もこれが不思議です、彼等はビジネス即
結婚生活とでも考へてゐるらしいです。

晩婚を主張して遊ぶ面白さ 翠夢
彼等にこんな境地が解らないのかしら

第二話

最近十年振りで或女の友達に逢つた

偶然街頭であつた、久闊を叙して或喫
茶店へ入つた話の末にこんな事を云つた
「私未だ獨身ですの、本當よ、男つて知
らないの、甲斐しやう無しでしやう」

實際廿に近いのに處女だ(近所できく)
諸君この話をどう御考へになりますか

太陽

廣江天痴人

立腹の暑きだ西瓜を叩き割る

太陽！彼は營養素と毒素を拵げつける
百姓は彼に起され彼の没落と共に眠る。

百姓にとつて彼は慈父母である。が今年
の炎熱はどうだ。田植さえ出来ぬ所があ

る。切角植えたに白く早からびて了つた
田圃がある。祖父は四十一年振りの旱魃
だといふ。父は六―七月にかけての旱魃
は今までに體驗せぬといふ。畑物は枯死
しやうとし田圃はすでに

早魃！おだやかならぬ職同志

となりサーベルの出勤した村さへある
溜池は乾上り時ならぬ鮒や鯉の味を苦つ
ほく喫した。山村では水田へ養鯉をやつ
てるが毎日一萬尾、太陽へ白く横たは
るといふ。測候所も雨量の少い事では開
設以來の尖端記録だといふ。法皇の島流
しで名高い隠岐では數千町歩の良田が太
陽を呪つてをるといふ。太陽の熱度はい
よいよ苛酷に疲弊した村を照りつける。

瘦せても枯れはせぬ也百姓 傳 重

と意地張り乍ら武内神社で雨乞したら
七月八日に降るといふ御神託！やれ有難
しと待つたに、その日は雲がのろのろと
太陽をカモフラージュしたばかり。

東京には「太陽のない街」があるそうだ
村は太陽が照りすぎてら困される

川上の奴等を呪ふ堰となり

だが今は川上にさへ使へる水が干上つたのだ。心配と眠不足で眼を血走らせやら百姓は今日も太陽を呪つてをる。

(七月十五日夢祭りの日記す)

男性

竹内機見女

學生時代の作文には勿論、創作にもこんな題で書いた事はない、併し眞面目に考へた事は無いでもありません。先づその缺點を並べ立てたりしては男性に讀者の多い川柳雑誌が、爲に評判が悪くなつては大變ですから、やめときます。それかと云つて賞めるのも何だか氣がとがめますので、有姿のまゝを……。

會社に入つた當初、仕事を教へて呉れた彼氏が、大變な上役に見えて、一言尋ねるのにも汗を流したり。

日曜に會社のグラウンド野球を見に行つて、その翌日「昨日は暑いのによく来て呉れましたね、サンキュー」と云はれて面食つたり。

時々、今里の方から來る市電の中で、何時も川柳雑誌を讀んでゐられる紳士の眞面目な態度に勵まされたり。浴衣着た行きよりの彼氏が、兄さんに見えたり。人生の半ば近くにゐても、淋しい事にはこんな事位しか感じません。

時に

「あんたの年には、わてら子供二人もありましたんやで」と老婦人に云はれて「この頃の青年は結婚能力が失くなりかけましたからね」と答へる女性があつたとしても、併しそれは男性の缺點には決してなりませんわ。一九三三・七一五

重役

日野華水

遅く出社して早く退社するのが重役とすれば世の中に重役は餘りに澤山あり過ぎる。

澤山な株の配當で遊んで食つて居る。しかしその株金は如何したんだらう。そんな事までわしや知らぬ。

「若し君が重役だつたらどうするね」の答へには

「重役と云へば其のタイプが身體の重量が非常にあつて重心が腹の裏へ來た様に反返つて歩く人が考へられるね。役目が重大であるんだから重任と云ふ理由さ。その意識が表現されたんだらうが併し僕だつたらそんなタイプにならない。反つて従順しいタイプを重要視するよ。

重役病と云ふ重患にかゝる。これが神經衰弱だ、その原因は重賞は自分の腹を太らし重利をむさばるにある。會社の重寶だ、重鎮だなんて僕だつたら威張らないね。

社員に對しては重聽などしない。重言を用ひないでもよい社員を養成して人材は大いに重用して、社員には重恩に報ゆるてな事をさすよ。

重役だからと云つて重禁を作つて若い時の事を忘れる様な事は仕ないね、若い時は若い時だ。そして社員からは重望の人だ、重徳の人だと云はれる様に

するね。

最も如何なる重幣でも受け付けないねそんな物は……。

重役でも時には重犯をおかして重典に依つて重料を科せられる様な事もあるが僕だつたらそんな馬鹿げた事をしないよ」

てな事を云つて居た人々、思つて居た人々が今、重役様に成つて居られるんだ。「どうです、重曹でさもお洗ひになつたら」。と云ひたくなるです。

葉巻を銜へて社員の日を逃れ 華 水

大 學

平 岩 司 郎

指一本がグツと帽子を突き上げると日焼けたスポーツマンらしい額に髪が散つて来て、瞳がサヨナラを送れば彼女は片手をハラ／＼と振つて歸へる。定まつたレコリドの定つた喫茶店にスツキリした折目正しく白い靴でもクツ／＼ならして戀愛觀、映畫評だ、近代學士を代表

する學内最も華かな連中。「君三十三年型のフオードに限るゼネ乗つた事あるか君」と言ふ、失敬なと思ふ鼻先へ「エヤーシツプのケースを突き付けて「どうです一本」と来る。ラグビー部の連中が不思議に之に唇し野球、陸上、山岳部が斷然此種だ、音楽部、繪畫部がチョツピリ顔を並べる。

彼女を前にしたら如何しても廣がり行く肩巾、両手が袴を持つと胸が物を言ひ出す。純真な位ひ丁寧で親切で古典的な重役型を崇拜し、義理堅い事は夏になつても角帽に紋付の羽織を着て杖を持たぬと歩けぬと言ふ連中、「あいつ二升は飲めぬな」、「いや三升は軽いよ」等と言ふのかおきまりで「下町の十二段屋の娘が好きだ高島田か桃割にした所がしつくりする、日本の女はどこまでも女らしく水々しいのが良い」と言ふ、信じて動かぬ所に可愛さがあるのか。新しいコンクリートへ人一倍大きな下駄の跡をつけた事で問題を起しかけたのもこの連中だ、どの學校にもある柔道剣道部の猛者で

端艇部辯論部もこの内にゐる。

多数でないとも期かになれない連中で一人一人見てゐると何處を叩いても憂鬱な埃ばかりが出る。それでいて新サラーマンイデオロギーを心得、在學中すでに游泳術の一端を覚え込んでゐる連中に、水泳卓球庭球馬術がある。其の他多勢が之れでありその中の一人に自分がゐる。

不思議な事に誰が何と言はうと如何に冷笑を送らうとも「我に圖書館の紙魚なり」と言ふがりがり亡者が姿を消した事だ、近世大學の大きな變化か。

教授は？さうです、時間から時間へ例へ學年初めは十八位の聽講生で試験前には百人近く増へても授業が終れば外見一つせず、さつさと來てさつさと出て行く。あとは中學生より少しましな喊聲と雑音、煙草、煙草である。

川柳等作れば異端視される、其の實は誰もが枯れ果てた姿に何か濡ひを求めてゐるのは事實だが——。大學は洞穴——冗談にもしろ面白い等と言ふものがない世の親が見たらハラハラと泣くだらう。

アルプス

石曾根民郎

山に初めての都の人は、仰々しいほどの山の道具を背負つてやつて来る。上高地館夏にだけなら、いらすもがなと思はれるロープまでわざ／＼持参だ。さてこのロープの効用たるや、ロツク、クライミングではなくして、梓川の砂地につれ／＼なるまゝの繩飛びの玩具に扮する。本人、すこぶるアルピニスト氣取りだがいさ／＼かくすぐつたい。けれども綺麗に鼻筋の通つたこの人種には、最も安全で且つ相應はしい遊戯かも知れまい。と、その朝での話柄として私はお嬢さんに語つてゐた。

上高地でキャンプをしてゐるうちに、隣のテントの都のお嬢さんらと懇意になつた。三日毎に炊事當番を仰せ付かる私は朝の小川のせ／＼らぎに、しやがみながらかうして屈託もなく肩を並べてゐると本當に青春といふものをこの齡になつて

初めてはつきり擱んだ氣持ちとなるのであつた。しかも話のひとつ／＼に納得のうなづきを示して呉れるお嬢さんと、つい話が長びいてゐれば、人の氣も知らぬげな「何時まで朝飯を待たせようといふんだい」の、テントから友がじれつたそゝうに嗷鳴る。ふつつりと切れる會話にもお互ひの微笑のかち合ひが残る、それがうれしかつた。

午前中で都へ歸るといふ朝、私はまたそのお嬢さんと炊事當番が一緒になつたこれが最後かと考へると、なんとなく名残り惜しい。お嬢さんの方ではそれほど目をあてゝ呉れなかつたかは知らないけれど、こちらはいちづに寂寞さをおぼえて来るのだつた。

そも／＼男たるもの、短いスカートの女性と登山道を共にするなら、彼女の前に立つて行くがよい。なぜといつて彼女の後からついて見給へ。坂道では全く短いスカートゆゑにもたまされるからだ何時ものやうにかう話をしてから、私はこのまゝ別れる想ひ出に、じつとお嬢さ

んのまなざしを忘れまいと見つめてゐたすると、スリーピング、バツグからぬけ出たばかりのお嬢さんは、そ／＼くさとして膝頭をかくす風に、スカートを下におろす氣持ちのあるらしく見せた。私はまづいことを放言してしまつたと悔いて、何かでまぎらかそうとあたりを見まわした。やがて、

「御覽なさい」と指さしたものが、たへお嬢さんのこゝろを動かし得るか否かをたゞす前に、私は既に、じつと腕さす腕の疲れるのを忘れて、いつまでも／＼そうしてゐたいせつなさを人知れず味はつてくるのであつた。焼岳のかすかな噴煙は、しばらく私たちの視野のうちに入つてゐた。

戀人

石森 靜太

病院の或る時。人物——A。B。看護婦其の他患者途多數。

暑い。此の頃の暑さでは金をやるつて

言はれても寝てやゐられない、ベツト生活に倦々してゐるAは、「チエツ」つて言つて見てゐた新聞を捨ててゐるんです。が寸時して、何故か獨りで笑ふんでした。

——ピリツ。六感つてゐるんなら其の時のB ことを言ふんだろ——。早速其の新聞を拾つてAの今見てゐた處をみるんです。

×月×日、運命判斷

○星の人。——喜び遠方より来る。女人の事と色情の難、注情。

「ふん」BはAの横顔をちらとみて、心で妬いて嗤ふんです。「奴、思つてやがら！」「何か今日は素晴らしい通信があるぞ」つて

チン——時計が一時を指すんです。

廊下を看護婦が一束の通信を持つてく来るんです。きまつたやうにね。

A、B、C、D、E、F……の腫が彼女の手もとに光り光るんです。

と、彼女は妬いて嗤つて、あつ！A一人へ手紙、ローズの封筒。（勿論女の名前なんです）

Aはどきつとするんです。

「おいラブレターだぜ、おこれよ！」

AはB、C、D、E、F……の眼を強く感じて、むりにもゆつたりと黙殺して讀むんです。

それから——それから

「僕の慾しいのはほんとうの戀人なんだAはそう、みんなにどなつてやりたいと思ふんです。」

女 給

吉田水車

キャバレー、Tの彼女は自稱詩人である。うたにもいろ／＼あるので何だと聞いたら、ケンチョウへ出してよくほうびをもらつたとのこと。俳誌「倦鳥」だとすれば大したものだ。青々さんかと問へばカチヨウさんからだと言ふ。どうも少しおかしいと思ひ詳しく問ふとありやうは斯ふである。つまり彼女おさなかりし頃にの縣廳の募集歌に入選して學務課長さんからごほうびをいたゞいたのであつたとのこと。何と言ふ歌ふ歌だかは聞きもらした。

ASAHI BEER
ASAHI BEER
ASAHI BEER
ASAHI BEER
ASAHI BEER
ASAHI BEER



髭

蛭子省 二選

髭(ウハ髭)、髻(ホホ髭)、鬚(アゴ髭)、
 の區別あれど、句を拜見すると「課題「髭」
 に限られてゐないので、髭として全般的
 に採用致しました(蛭子)

講堂で校長の髭偉くみえ 天馬
 下役をならべて髭の手入する 喜由
 外勤になつて巡查は髭を置き 九文錢
 あご髭がたつと小旗の應援歌 新市街
 課長にもなれず不精髭がのび 義人
 髭白き恩師をかこむクラス會 啓秀
 錢湯であつたお髭は藥賣 芳一
 日曜の雨髭抜いて居る 課長 燕雀
 朝風呂で髭剃つた丈けの日曜 角丸
 髭のない副院長をなつかしみ 春秋
 更生は髭を落してもみ手なり 錦石
 特徴のあご髭剃つて親しめず 水車
 成功へ邪魔にはならぬ髭となり 砂詩朗

剃落す髭へ床屋は念を押し 孤鶴
 失業の髭が女房の氣に入らず 紫陽
 昇給へ口髭ほしい氣にもなり 十靜
 抱ひた子へ髭をひかせる若旦那 フヂノ
 社長にはまだ程遠い髭をなで 青波
 猥談をするとはみえぬ髭をもち しとし
 變裝の籤に旦那は髭を剃り 世都象
 更生は髭をば剃つて考へる いの助
 子供皆髭で位をつけて居り 美津女
 下足番髭をはやして若いなら 元山
 新社長髭のないのへ親しまれ 喜帆
 口入屋髭をながめて笑ふなり 白峰
 役人の髭丈け見れば面白し 山月
 髭剃つて時計みてる妻の留守 祥月
 末席の髭は氣輕に唄ふなり 竹雅
 差同ひ髭をひねつて話出し 銀波
 チャップリン髭で縣會議員なり 柳人

川柳家戸籍調 (續)

(係) 山雨樓

(1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日
 (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務
 先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以
 外の趣味 (10) 配偶者及子供の有無 (11) 嫌
 ひなもの (12) 川柳に手を染めた年月

小林不浪人 (331)

(1) 小林長三郎 (2) 不浪人 (3) 明治二十
 五年二月二十三日 (4) 青森縣黑石町 (5)
 青森市浦町橋本二八三 (6) 著述業 (東奥
 日報社を近く退社) (7) 俺に似よ俺に似
 るなと子を思ひ(路郎)泣いてゐるうしろ
 通ればあけてくれ(水府)本當の満足はた
 ら笑ふだけ(三太郎) (8) あきらめて歩け
 ば月も歩き出し、およそよき機嫌となつ
 て雨をはめ、馬鹿だつた記憶を辿る朝の
 お茶 (9) スポーツ何んでも (10) 妻と一人
 娘あり (11) お山の大将、賣名漢、インテ
 キ野郎 (12) 明治四十三年の春。

(322) 中島紫痴郎

(1) 中島熊七 (2) 紫痴郎、弓之介、愛染
 明王、六極庵、竹翁 (3) 明治十五年五
 月廿四日 (4) 新潟縣魚沼郡大崎村 (5) 信
 州湯田中 (6) 醫業 (7) 人の句は皆よく又
 其境地をうらやましく候 (8) 毎日變り候
 今日之自信句、負けまじの心大地をふみ

髭剃を探せば麻雀クラブに居
御苦勞といふ將軍の髭の色
あご髭を撫でて金策盡さるなり
宴會は髭のあるのが先に酔ひ
髭の濃い入を女房覺えとき
田舎の子髭へお辭儀をして通り
髭を剃り病院を出る單衣一杯
あご髭を抜てはほめる飛行振り
不精髭剃れば剃つたで笑はれる
髭は剃つたが約束もない休み
軍人も出世すると髭が出来
歌舞伎座の招待券へ髭を剃り
髭つけてやつとうなづく顔に
髭なんか働く者に要るものか
門衛の髭恩給の名残りにて
意見の側で無意識に髭をぬき
髭の隣へ返盃をたのまれる
榮轉の記念に髭を生やしかけ
先生が髭剃つてくる月曜日
あご髭をさかさになる病床
腑に落ちぬ思案が續き髭がのび
回り椅子髭のないのが社長なり

青 兒
秃 山
三 汀
幸 捐
今 雨
富 士 雄
一 杯
某 人
春 峰
義 風 子
菊 路
吉 左 右
春 光
方 眠
秋 光
富 美 三
た け を
笛 秀
曉 童
銀 雪
紅
同

髭剃つてみても淋しき養生地
先生の髭面白くない幾何
不精髭無沙汰を詫びる腰を
習程に働きのない外交員
髭剃つて今日のプランを若さ
此街の名物髭の生字引
休職になつても髭の手入なり
退院は記念の髭を置くとさめ
髭がならむで高給を食むで
恩給がついて退職髭をそり
鮮人は髭も苦にせず雨つゞき
口ひげがあつて一役買つて出
ほめられた髭昇給にもれて
盛り場に癖ありそうな髭が
快諾の髭の濃いのが嬉しくて
むどうさな髭寫してる父で
髭を恐れないものに女房が
髭剃つた事も嬉しい戎橋
山羊髭は院外圍の古參なり
代書屋の髭それ丈けのもの
中年の戀に役立つ髭をもち
白 扇
三 思 樓
多 郎
北 陽 子
曉 童
文 路
變 人
九 波
寒 草
銀 雪
柳 水

しめる(9)書畫、骨董、植木、建築(10)妻アリ子五人(11)意氣地なし(12)明治四十年頃。

(323) 金子 吞風

(1)金子喜一郎(2)吞風、有魚亭籠妻居等々(3)明治二十八年九月六日(4)上田市袋町四五七〇(5)同上(6)鮎商(7)篠原春雨氏の句なら片端から好きです(8)約二十年にもなりませんうが其の間作つた句に自信を持てる句など無いのが誠にお恥しい次第であります去年の暮にこんなのを作りましたが……美望の中に一家は海へ發ち(9)謡曲、小鳥、植木(10)女三人、男二人(11)蛇、毛蟲(12)大正三年十月。

(324) 磯部 天邪鬼

(1)磯部源一(2)天邪鬼、朱雀洞、春日光路(3)明治三十七年八月七日(4)横濱(5)横濱市神奈川區玉川町四九(6)目下無職(7)天井へ壁へ心へ鳴る一時(日車)憂鬱な句にとざされし銅貨(宵雨)音もなく夢の釣鐘落ちてくる(不倒人)(8)紫の雲泣いた日もなつかしや、口ふれたさくらんぼあゝ夏の日、炬火心の眞洞にとも(9)間口廣く奥行狭く列記不能(10)どちらもなし(11)あれやこれやいろいろ(12)大正十一年春頃。

(325) 加藤 文 醉

(1)加藤文雄(2)文醉(3)明治四十四年

惜しそうに髭剃つてゐる父の老 一步

海岸

橋本緑雨選

母の眼にちと早すぎる髭を置き 八羊

海岸も見えて喜ぶ山の上 山月
 海岸がよいとお醫者が言ふた^た 紅
 故里の濱は十年前の波 眞太
 海岸の妻さを知つた防波堤 禿山
 海岸へ誘はれて來た顔でなし 今雨
 海岸で口説かれそうに女ゐる 元山
 海岸へ皆んな揃ふた潮干狩 文路
 海岸へ黙々と來て 詩人めき 北陽子
 海岸へ二人幸福をうに來る 曉童
 海岸にこさへた池が氣にかゝり 美津女
 海岸へ詩集抱へた病み上り いの助
 貸ポート沖へは漕げぬ手振り^な 世都象
 海岸へ立てば希望を大きくし 葉光
 海岸へふと童心の貝の色 新市街
 海岸へしげを案じて母も くる 青波
 海岸で一夏送る好いくらし 菊路
 海岸を歩くだけでよい海水着 だけを
 海岸線せまい日本と思はれず 十靜

海岸へ來てゐる心君知るや 義風子
 海岸の砂へ一錢見出し得ず あや美
 海岸で相手の心確かめる 青兒
 寝轉べは海岸線が曲つて來 明珠
 海岸は大漁の歌に明けて行く 富美三
 海岸へ來て本當を明かされる 銀雪
 海岸のバスへ水着のまゝで乗り 吉左右
 網曳きを見る出養生細く立ち 芳一
 海岸へ思ひ思ひの浪の音 啓秀
 海岸で髭をはやした友に會ひ 天馬
 人避けて海岸あゆむ出養生 操川
 海岸へたゞ事でない人が寄り 紫陽
 海岸で人目にはいゝ夫婦なり 春秋
 下駄脱いで見た海岸の白い砂 錦石
 海岸へ打揚げられた女下駄 無鬼
 濱風に松はすねてるように生へ 方眠
 海岸の母へポートは無頓着 春光
 海岸へ今年も同じ店を出し 水車

四月一日(4)愛知縣祖父江町三三(5)出生地に同じ6)料理兼旅館(7)悠然と生きてる人に惚れてゐる(8)煙突の影が我が家を狭くする(9)撞球、書道、觀劇(10)妻と母と僕(11)生意氣(12)大正十三年四月。

(336) 上野十七八

(1)上野十七八(2)同(3)明治三十三年七月十二日(4)八幡市(5)同槻田官舎四條三丁目(6)八幡製鐵所監理部檢定課分初係(7)毎月見せられる皆様の句に對して頭の下るばかりであるにも好きな句が多いのです(8)恥し乍ら未だをうし句を作り得ず惱んであります(9)謡曲、園藝、蒐集(10)妻と二女あり(11)酒とそしてそれに酔つた振りをする者、こんにやく(12)昭和二年十月。

(337) 首藤竹楓

(1)首藤政夫(2)竹楓(3)明治卅八年十月二十二日(4)大分縣直入郡竹田町(5)神戸市神戸區下山手八丁目(6)二佐伯方(6)神戸市電氣局(7)好い句はみな好きです(8)想像のまへに現實曲つてる。女心よ風が木の葉にふれる(9)スポーツならなんでも(10)無(11)女々しき事、言實の伴はぬ男(12)昭和二年頃と記憶致候

(正誤)

本戶籍調の番號左の通り訂正致します
 八年五月號(332)高島玉兔朗は(333)の誤りに付以下(33)迄十番つゝ繰下げ。

海岸をハラ／＼させる波もあり
海岸へ釣の一人が遅れて來
九文錢

佳作

海岸の景色二人の目に入らず
海岸を都育ちと云ふ歩み
八歩
これからもある事と海岸か
ひさし

瞳

歡喜する君が瞳にひかりあり
マドロスの瞳に上陸の第一歩
祥月
感激の瞳よ泪よ青春よ
北陽子
昂奮の瞳をおとす膝がしら
詩郎
ねだる妓の瞳か惚れてゐるさう
紫陽
瞳からそつとぬすんだ戀でした
義勇
ちらと見し瞳の底が燃へてゐし
しとし
田園を濁つた瞳が侮蔑する
青波
死の瞳他人の顔が多すぎる
春秋
瞳をばそらし心が踊るなり
富美三
疑ひの瞳が眼鏡越しにくる
十靜
憐憫の瞳のなかに今日も生き
秋光
すみきりし酒盃の底の情痴の瞳
芳岸

水谷 鮎美選

海岸に足を濡らしただけのこと
海岸は荒れても三味の音がする
海岸に寝轉べば雲崩れたり
松雨
海岸に來てバツトをからにする
變人
海岸の長さ思の盡きぬこと
しとし
昂奮の儘海岸につきあたり
三郎

子の瞳はつきりとして教へられ
朴甫
情熱の瞳にうつる酒場の灯
泉人
戀を覗けば親のまだみぬ瞳して
喜由
無心状態はいつかかきさきり
明珠
眞實を語る瞳の光つて來
あや美
何も彼も瞳にみせてうつむきぬ
變人
想ひ出の瞳にうつる街の灯よ
一馬
凝視した瞳へ一つ水馬
青兒
愛人のほくろもうつる瞳の底よ
たけを
瞳をとちてみだらな思出を生か
義風子
冗談へ戀の瞳をふと感じ
無鬼
感情の瞳はぬれて春の宵
錦石
哀願に冷たき瞳すみゐるたり
三郎



▼本社では新計畫と支部の増設のため社友と支部幹事とを分離する事に致しました。社の上の待遇上に何等の變りはありません。前幹事の廣江天痴人水田光哉の

兩君は本社の功績に依り社友待遇に推薦することにになりました。
▼福田山雨樓君は六月廿日公用で和歌山市へ出張されたので白濱温泉へまで足を延ばれました。

▼木村半文錢句集刊行記念會はなか／＼の盛會でした。會場は社友増位汀柳君の厚意で當夜單球會館を休館されてお貸し下さったのです。參會者の中で路郎、半文錢、日車、松窓、百樹の諸氏は何れも三十年間も川柳のため活躍されてる方々で實に珍らしい會合でした。

▼吉田水車、姫田夕鐘、兩君は七月十五日夜京都清瀧へ行つて一泊されましたが隣間に客があつたので一睡もせず歸阪されたそうです。

「清瀧の流へふたり宿をとり」夕鐘の句

「涼しさは河鹿の聲に明けかゝり」水車の句

▼福田鶴峯君は六月四日母堂の病氣平癒の祈願に高野山へ登られました。

▼戸倉普天君は六月廿日北陸東北地方へ旅

たゞれける瞳に温泉の夏の色 竹雅
面会所瞳の眞珠見たばかり ひさし
眞實に夫を信じざる瞳 南葉
うつろなる瞳に壁の眞白なる 莞路
ふと雨が寂しくなつてきた瞳 銀波
あはてたる瞳の行衛おもしろし 水車

佳作

瞳のまるき愛の巢の日本晴れ 砂詩朗
好奇心ふとマネキンの瞳を見。 春峰
氣にかゝる人へ瞳が歪んでる 芳一
瞳うるませ兒やなに悲し 松雨
悔ひる身のうつろな瞳空へゆく 九波
信ちきる瞳へ煙草ふきかける 元山
いたづらを許す瞳の細りきり 變人
金策の瞳に白ろう夏の色 新市街
悲しき夜の瞳に月がまるいよ 柳人
冷靜な瞳が 吾を射て寂し 靜太
解消を主張瞳を凛々とさせ 吉左右
叔母に聞けばこの娘の瞳まろげ 紅
抱きあげし子の瞳に恥ること多し 啓秀
情婦の瞳へピエロとなりて 彼 右爲郎
櫻んば瞳をよせてゐる愁ひ 同

秀吟

退院の瞳これから働く氣 九文鏡
亡母おもふ瞳に胡顏子の實の 白扇
戀人の瞳を信ちきつてゐる 文路
息絶へた友の瞳を抑へたり 春光
あまへてぬれた瞳をよせてくる 眞太
ひとみそらしたばくのかたこひ 靜太
空虚なる瞳へゆらぐ青桐 曉童

三光

泣ききぬれた子の瞳は赤とんぼ 銀雲
偶像をおふ瞳にさむき雨の音 方眠
年上の戀の瞳をからかへり 今雨

(軸)

まるき瞳をうたがふべくもなむ 鮎美
十字架をみあげる瞳血がにぢむ 同

轉居と町名變更

▼松盛琴人君は 大阪市東區平野町二丁目十一
一へ▼藤田紫石君は(大阪市此花區上福島
南二ノ一三二へ)▼竹内勝利君は(徳島縣三
好郡三繩村鐵道官舎へ)▼森川蝶路君は(大
阪市住吉區阿部野筋一ノ八四へ)▼前田雀郎
氏(東京市蒲田區羽田穴守八一四へ)▼矢野
錦浪氏は 東京麹町區富七見町一ノ四に變更

行されて、金澤から左の句を寄せられました
「道間へば百萬石のなまりあり」晋天

▼竹田芦穂君は七月二日 鹿兒島霧島方面へ
旅行されて左の句を寄せられました。「混浴
の露天プールで蟬を聞き」芦穂

▼平井若太君は七月一日發行で「雜學」の創
刊號を出されました。大いに發展を望む。發
行所は滋賀縣甲賀郡寺庄村寺庄同君

▼植木鬼佛は「昭和警察川柳」を發行されま
した。東京赤阪表町警察署内同君

▼有澤鐵吉君(高知)から三月廿八第二期播
種を終り二期は豊年の知らせを稔つた稲の
穂を送つて農事の樂しさを報らせ來ました。

▼山本丹路君は藤の病院へ入院されてゐま
したが退院されて 自宅で靜養されてゐます
一日も早く全快を祈ります。

▼久佐太郎君は 三ヶ月間病氣のため入院さ
れてゐられた由一日も早く全快を祈ります

▼福田鶴峰君は 七月七日岳父の永眠で郷里
へ歸へられました。哀悼の意を表します。

▼私は七月廿一日夜行で一週間郷里と立山
登山へ行く豫定です。親しく郷里の川柳家に
お目にかゝりたいと思ひます。

▼本號編輯は路郎先生、山雨樓、鶴峰、豆萩
機見女の諸君と私とで本社と事務所とで致
しました。

肱・枕・艸・紙

(八)

梅 本 塵 山

【七十三】

明治十年頃に出版されたる、千葉某譯「造化機論」といふ書あり。造化機とは生殖器の義にて、性慾の研究書なるが、當時にては新奇の學說なるより、世間の大評判となり、購讀者の多かりし故に、此れに續きて「造化秘事」「男女衛生新論」「男女自衛論」等、類似の書が多く出版されたれども、最初の「造化機論」程の聲價は無かりしが如し。此外に「男女〇合論」などといふ、露骨の名をつける雑誌も發行されたるが、是等は現今出版される性慾研究書に比較すれば甚杜撰なるものと思はるゝが、挿入せる解剖圖は色摺りの石版にて、大膽至極のもの有りて今日ならば發賣禁止となる可きもの也。

【七十四】

現今の質屋は、取締規則に據りて營業すれども、江戸時代の質屋は、規則は有りしも、雜駁にて依據し難く、萬一、質

屋が贓物とも知らずして質に取り、其後に到りて盜賊或は詐欺犯者が檢舉さるゝ時は、引合と稱して、質屋は町奉行所に招喚せられ、嚴重の取調を受ける事となり犯罪者の罪案が決定する迄は、幾回も招喚さるる故に、質屋の費用は莫大なりしそれは招喚さるる毎に、町代、五人組などと稱する者を、多く同道するため也。予の家にては古くより質屋營業をなせる

が前述の如き事件の發生を、豫防する手段として、傳手を覚めて、八丁堀に住む時與力神田造酒之進と懇親になり、毎年盆暮の二回に進物を贈る上に、三月の花見時に、自宅に招待するを例となりたり當日は其與力が妻女又は娘と、都下の同心一名と供人を隨へて來り、先づ自宅に於て晝餐を食ふ後、一同飛鳥山に到りて花見をなし、王子の割炙店扇屋に行きて酒宴を開き、薄暮の頃各歸途に就きしが其時は予の父母も予も、御供と稱して一

行に加はり、同勢七八人にて女と子供は籠に乗りたり。是等の費用は多額なりしならむが、斯與力と懇親になり居る時は縦ひ贓物を質に取り、後に犯罪者が檢舉さるゝとも、決して引合にならず、町奉行に招喚さるゝ事も無く、總て内済にて事了り、少しも損害を蒙らざる也。亦無頼漢なども、八丁堀の與力の出入する家と知りては、大いに恐れを抱きて、金品の強請に來らざりし 此れは今日にて云へば、贈收賄なれども、當時に有りては尋常茶飯事なりしならむ。

【七十五】

昔、江戸谷中西光寺門前（現今の上三崎兩町）に、齋藤權右衛門といふ富豪あり。屋號を三河屋といひ、號を阿心庵是佛といひて、質屋を營業とせるが、後者の餘り自宅内に能舞臺を建て、能樂を演じたるが公に聽え、忽に檢舉せられて、取調べの後に手鎖の上町内預けとなり、

窃に莫大の賄賂をなして、漸くに放免されたる事あり。亦、長男源之助は、新吉原江戸町二丁目佐野樋屋の花魁黨に馴染み、或る日兩人情死を謀り、舌の尖端を截りたれども、生命には異状なかりし、されど此事が公に聽ゆる時は、日本橋畔に三日晒しの後、非人に下さる掟なれば、此時も多額の金子を使用して、僅に事無きを得たり。後に此源之助が、清元太兵衛の娘お葉の婿となりて、四世延壽太夫を名乗りし也。二男三右衛門は、狩谷三平の養子となりしが、此狩谷家は、有名なる披齋の後にて、屋號を津輕屋といひ、豪家の風聞ありしも、三右衛門が相續して後、遂に家産を蕩盡したり。三男が齋藤家を嗣ぎ、父の名を襲ひて權右衛門と稱し、質屋の主人となりしも家業振はず、明治維新の直後に廢業なし、妾と二兒と同棲し居たるが、明治初年に死したり。此一家の人々と予の父とは懇意なりしに由り、同五六年の頃、或る日自宅に津輕屋の主人來りて、懷中より赤銅硯一面を取出し、これを買求めてくれと頼む故に、父は氣の毒の到りなりとて、若干金を贈りたる事も有りし也。

【七十六】

今は會席料理のみ行はるれど、昔は一般に行はれざりし也。當時の上等の料理は、刺身、口取物、焼魚、甘煮、酢の物其外に到るまで、一々大皿に盛り、而して剗物とて、大根と胡蘿蔔とを材料に用ひ、鶴龜、松竹梅、石橋の獅子、波上の玉兔、花卉などの形を造り、それを肴の裝飾となし、懸盤に載せて座敷に出し、先づ料理人の手腕を來客に翫賞せしめて後、盃盤の間を周旋する女が種々の肴を一々小皿に取分けて、客の膳に配りたるが、小皿に肴を取分る時は、孰れも甲乙無く平等に取分けて後、大皿の中に一片一塊の肴も残さぬを作法としたり。されば無經驗の女は、小皿に肴を取分るに、大いに苦心したるもの也といふ。亦、客は酒食して立歸る時、殘肴を折詰にさせて、自宅へ土産とするが如き、下卑たる事をなさず、萬一土産を必要とする時は別に新しき肴を誂へて、折詰にして持歸りしが、今日は殘肴を持歸るを本意とする也。會席料理のみ流行して、古式料理の全く廢れしは、明治廿二年頃なる可し。

【七十七】

昔は宴席に藝妓を聘するに、藝を第一とし色を第二となしたり。當時の藝妓も春を賣りたれども、何時にても客の言に應じて、忽に枕席に侍する藝妓は無かりし。近頃は三絃を持たで、宴席に出る藝妓有るも、此れを奇怪とする客無し。今の藝妓は藝妓に非ずし柳病菌繁殖機なり。

【七十八】

予は昔の蔭間といふ者を、一回も見たる事無けれども、當時、町家の娘より一層華美なる、幽禪模様の振袖を着て、髪を文金島田に結び、厚化粧をなして歩く娘を、往來の人々が見て、あれは大方蔭間ならむと噂するを、屢々耳にした事有れば、一般の町娘よりも、風俗は妖艶なりしならむ。亦、明治の初年に、前述の如き風俗にて、市中を馬に騎りて歩きし者あり、世人はこれを蔭間なりと云ひしがその實否を知らず。其頃、盛裝して顔に紅粉を施し、市中を騎馬にて奔走したる一女性あり、此れは大名の大關大和守の奥方なりとて、一時世間の評判となり。

【七十九】

明治の初年には、懲役に處せられたる犯罪者を外役に就かしめたるが、東京の道路修繕工事は、大方懲役人等の手に成りし也。彼等は柿色の木綿服を着て、小さき饅頭笠を被り、腰に太き鐵鎖を附けて身體を二人づつ連結なし、監視に引率されたり。明治十年六月、河竹默阿彌が、勸善懲惡孝子譽」といふ名題にて、懲役人の外役を狂言に脚色し、先代の菊五郎、左團次の兩優が懲役人に扮して、滿都の評判を取りし事あり。

【八十】

酒中花といふ小兒の玩具は、天和の頃より有りたるが、江戸の末期には、淺草寺境内の楊枝店に於て賣りたれど、近頃は廢れたるが如し。予の幼年時代の玩具にて、今絶えて無きものは、土製の面子、鉛の面子、鉛の天神、ぼこんく、豆鐵砲、與二郎兵衛人形、お蝶殿の手車魚釣り、錢獨樂（一名錢車）今戸焼人形竹の蜻蛉其外なほ多く有る可し。陀螺獨樂といふものは昔は貝を用ひたるが、此

頃は金屬製のもの而已用ひらるゝ也。

【八十一】

近頃、來客に對して座蒲團を俯むるは一の儀禮となりたれども、江戸時代には來客に座蒲團を俯めず、中産階級以下の家にては、來客用の座蒲團は無く、大方は疊の上に座せしめたる也。明治の初年に、予の宅には華族顯官等も來訪されたるが、其等に供する座蒲團は二枚の外に無かりし。料理店などにも來客に蒲團を出さず、況くこれを用ひる事となりしは、明治十五年以後なる可し。

【八十二】

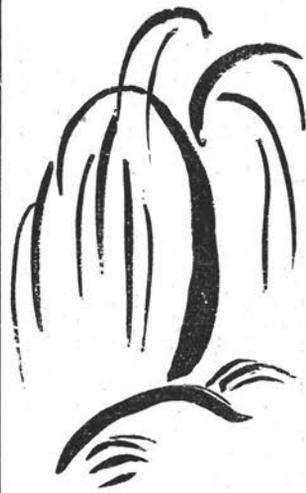
江戸時代の町家の下婢は、年増女多くして、新造は稀有なりしが、此れは理由の有る事にて、年増と新造とは、其給料に差違ありし故に、十七八歳の少女にても下婢に出る時は、先づ眉を剃り齒を染め、而して年増女となりし也。されば行儀見習ひの爲にて、給料を望まざる下婢は、廿歳以下にては元服せざりし。亦當時の下婢等は、自己の寝具、髪、洗濯盥耳盥等を持參して、主家の物品を使用せ

ざりしが、古くは鐵漿壺をも持參したりと云ふ。昔の下婢は相州産の女最多く、これに亞ぐは房州産の女なるが、江戸近在の女も尠からず有りし。明治以後の下婢は、年増よりも新造の方多くなりたり

【八十三】

獸肉は不淨なるものとて、昔の人はこれを食はず、偶藥喰と稱へて食ふ者有るより、麴町平河町三丁目に獸肉店あり、東兩國回向院前にも有りて、猪肉を山鯨鹿肉を紅葉といひ、此れを食ふとも他人には秘密になしたり。亦、猪肉は精分の強きものなれば、食ふ者は身に黒瘡を生ずとて、痛く忌諱する者も有りし。牛馬の肉などは夢にも食はざりしが、當時、彦根藩の井伊家に於て作りたる牛肉の味噌漬は、無二の滋養品也とて珍重したれど、元より賣買さるゝ物ならねば、此れを希望する者は、同藩士に傳手を求めて買ふ事なるが、牛肉の一小片を曲物に入れて、代金一步なりしと云ふ。

各地柳壇



いれ割を句るあちのい＝

本社七月例会

於道頓堀俱樂部

七月六日 昨今の酷暑にもひるまず、川柳道に精進する團士諸君は、開會遅しとはかりに道頓堀俱樂部會場へ詰めかけ、勿々皆鉛筆と句箋を手にして作句三昧に入るといふ眞剣振りは、いつものながら他には見られぬ川柳雜詩社獨特の光景然も當夜は久しぶりに路郎先生のいともの快活なる風貌に接し爲めに會場は非常なフレッシユの零圍氣を生じた、そは路郎先生が當夜物語られた如く、永らく病氣の爲心ならずも川柳熱を削がれ居りしが、今回病氣全快と同時に、累贅彌ひされつゝありし身邊の雜事も先生一流の路郎魂を以て一蹴し茲に全く健全なる川柳家路郎としての風貌を復活せしめ得た爲である、尙先生は將來現柳壇へ彗星の如く益々光溢を放たんと誓はれし一

言には、全く喜びと希望に満ちた感銘を與へられた、斯くて二三席題の披露ありて先生の大阪名所募集句 第二回の披露及句に就ての講評其他ありて十時半閉會(琴人記) 出席者

路郎、綠雨、海洋人、鶴峰、豆秋、紫石、新市街、曉星、秋光、紅、戀人、鴨野、一笑、氷炭、えい、雨少、青兒、いわ、夢裡、佳峰、蘭水、千代子、涎湖、禿山、冬光、春光、かほる、里十九、水車、鮎美、八步、柳次、夕鐘、朴甫、銀波、文蝶、あや美、正夫、山兩樓、千鬼、秋無草、沐天、白柳子。

席題 骨 互 選
 全く夢の様だと白骨はさみあい
 人生はこんなものだと白骨ひる時
 白骨ともなれば涼しからん
 白骨が無縁にされる日の淋し
 白骨の勇士迎へる臯月雨
 蘭水

白骨が出て地下工事早仕舞骨のでた話電燈暗らすぎる涙もうつきて白骨ひるはれる白骨に向ひお詫びをする日あり白骨へ町の子供が靜かなり白骨へ小さな指紋ついてゐる白骨が出たで貸家の建ちぐされ東髪白骨のこと考へる白骨を土工しばらくながめて居る白骨が出てから家が空いて居る

席題 戀 琴 人選

子の戀とならんで父は素通りしあの戀とこの戀がありはせつける慾望を断つて帝都の土に居るその日ぐらしの戀になつてるシヤボン玉慾のある子の顔では鉛筆をなめてそるばんづくめなりつゝ、ましく手を膝にのせ慾があり大きながくさつて居つた夏密柑食慾が、すゝむ病室の窓娘の慾を叱つて母は買に行きまだ慾のあるのか鍵の数がふえ慾なと云ふて大阪を歩き新世帯慾のない日が續くなり紅をとく指に慾望もつれたり

席題 大 工 かほる選
 晝休み棟梁わざと座をはづし
 かいな屏越し〜大工汗をふき
 良い女大工の音をためてゐる
 別荘を大工一人建てたよう
 曲尺の先で「パンパン」を持つて行け

紅人 變子 千代子 鶴峯 青兒 柳次 水車 雨少 里十九 青兒 人選 文蝶 雨少 涎湖 綠雨 子鬼 變人 鮎美 一笑 いわ 文蝶 雨少 海洋人 新水 柳次 選 里十九 秋無草 銀波 紫石 涎湖

もの憂さへ電気カバの色が瘡
 言ひ過ぎて浮かぬ心の煙草の輪
 憂鬱な女子供がないと言ふ
 哀愁の壁に神経だけ尖り
 白粉の浮かぬ心に延びきらす
 縁談へ心の浮かぬ日がつき
 真心に恥ぢてるやうな黙りやう
 慰めてくれる言葉へ又沈み
 別な心で詰らなく坐り
 疑つた小さい心酒にする
 浮かぬ氣で歩けば泥をはれられる

川柳御池橋句會 (大阪)

七月十四日夜於日本樂器會社 村松夢裡報
 兼題 斷り かほる 選
 斷りが云へず善人立つてゐる 青兒
 斷りをすれば淋しい風となり 同
 斷りを云ふて白靴履き直し いわを
 斷りを云ふて頭を上げてゐる 同
 淋しい斷り支關へ座り切り 夢裡
 兼題 冷い かほる 選
 麗人と云はれて冷き光あり 一羊
 青桐の下で冷いものを喰べ いわを
 猫の足冷く感じ蚊を追ひぬ 同
 嫁入て後は冷い顔で逢ひ 青兒
 此の人は冷い方とつゝるで居る 同
 兼題 地下鐵 互
 意味ありそな地下鐵にしてしま 一羊
 黙然と顔見合せて地下鐵道 同
 地下鐵へ兎に角乗つて見ると決め いわを
 地下鐵を降りて下駄屋に用があり 同

地下鐵の收札得意そな顔
 地下鐵の乗り遅れ心配無く待ち
 地下鐵の時計きつちり合つてゐる
 地下鐵のあつちの席と變るなり
 兼題 ネクタイ 互
 ノネクタイに若くて見る淋しさ
 ネクタイの色にそつと顔を上げ
 計畫をたてネクタイ締め直し
 ネクタイを寫しパットの？を待ち

川柳加茂川句會 (京都)

七月十日(月)夕於仲源寺 司 耶報
 兼題 水馬 橋本兆迷選
 水馬花は水平線に揺れ 竹雅
 水馬の心境もほし夏の日 昌一
 モミガラと水馬が廻ふてゐる 同
 水馬瓶の中では廻れない 同
 水馬空は夕立雲なるぞ 佐一郎
 水馬こんな世界を飽きもせず 清堂
 水濁れるまゝ廻ひつゝす水馬 雨山
 兼題 カートン 上柿雨山選
 別荘のカートンから一人二人三人
 しんみりと語ればカートン月の色
 カートンのむぎの酒がはですぎる
 カートンがゆれて素足のある
 カートンへ第六感が働いて
 カートンを手荒くしたアツパツパ
 カートンを今パトロンが出て来き
 カートンにマグダムの氣嫌悪いなり
 カートンの色になじまず獨りある
 氣の置けぬ友へカートンぐつと寄

カートの没を見つけた婦人記者
 カートンにははでな模様の社交室
 カートンのたるみと立つてゐる女
 カートンのある寺の窓女ある
 粗品呈上カートンの内が見え
 兼題 渚 村岸清堂選
 唄はれて唄うて渚の脚線美 竹雅
 渚の風が漁灯だけで残す暮 陸平
 岸の足は渚でゆらゆらすなり 陸平
 足は渚の砂がゆかゆく逃げ 雨山
 打上げた渚の下駄の赤びるぞ 同
 渚から或夜のくらげの青い夢 九の字
 貝殻を拾ふ渚は暮れかゝり 同
 片戀の渚へ捨てたものがあり 同
 舟が出て渚一とこにごつてゐる 同
 髪を洗つた女がある渚 同
 並行に三日月とある渚 同
 渚行く二人へ終列車の笛 佐一郎
 あきらめて来れば渚に浪よせる 同
 眞白な足が渚すいこまれ 同
 思ひ出があつて渚が近すぎり 同
 (住) 病身な母と渚を歩くなり 陸平
 兼題 墓 齋藤松窓選
 下宿屋の兒に墓はれてゐる 別れ
 田植ふと都を墓ふ雲を見る 同
 前へ廻り後へ廻り家の犬 同
 挨拶もよう出ずに居て墓ふてゐる 同
 姉サンを墓ふ踏次の舞扇 同
 朗らかにお墓ひ申す白餅 同
 家計簿に無理をこさえて墓はれる 同
 先生を墓ふお下げへ逆えず 同

封筒の色が變つた許嫁

許嫁好い座蒲團を出してくれ

流星をこわくと見る許嫁

(佳) 灯の街へ心眩しい許嫁

(同) 許嫁見送りに来て静かなり

(軸) 許嫁都會の風に染りかね

兼題 海水着 かほる選

海水着つくく腕の瘦せを見る

れそべつてゐる新型の海水着

海水着鏡の前に立つて見る

海水着バット一本欲しくなり

クツキリと海水着の型見せて風呂

去年のがてんと合わない海水着

海水着ごつちを見て男の眼

海水着はでにはしやぐ浅いとこ

父親と砂に埋める海水着

燈臺の生活が見たい海水着

海水着卒業からの立巻

瀧明氏歓迎句會(奉天)

六月十日 於天帝國會館 江戸みつる報

當夜本社客員大島瀧明氏を迎へ當地の柳友

先輩諸氏が歓迎句會を催され柳路氏小生出席

句會後歓迎の酒杯を交し談笑數刻初夏の夜

を惜みつゝ和かにいと盛大理に十二時三

十分散會

尙奉天支部創立句會を 六月初めに催すはず

でしたが都合にて延期致し 七月九日には是非

共會催の準備致して居りましたが、柳路氏が

席題 宣傳 青龍刀選

ロボットの廣告祭に太い息

宣傳に呉れたシヤホンの是つぼち

飛行機のピラ風ありビルディング

宣傳へ巡查和服でマッパ

ひやかしの客へ宣傳マッパ

自己宣傳誰れも知らないつもり

宣傳を面白く聞くとこる手

煙突に立ち安つばい名が賣れる

宣傳が御上手いのも火の車

宣傳はいたしませぬと老舗ぶり

(軸) 宣傳が下手でとおも屋の亭主

席題 時 瀧

監督を尻目に晝の空きつ腹

時世時節かきから町の雨に濡れ

笑案がやつと解つて時が鳴り

電氣時計も一度見て告知板

發車ベル時計ホームで見直され

サイレンに國の語に骨が折れ

當選の標語の裏の時を飲み

(佳) 病床の壁へ一秒づゝ響き

(同) 腕時計脱衣棚までタカール

(同) 時間外寝巻のまんま頼信紙

(同) 時は流れたら思ひ出が残る

(人) 大時計空腹の聲伸びてゐる

(地) 時計を出して人生を見つめる

(天) サイレンに朗らかに働か作業服

(軸) サイレンにびつた合ひた快感

川柳 松江句會 (松江)

七月一日於天神みどり喫茶店 奈良井柳人報

題 早魁(柳人選) ダリヤ(天痴人選)

早魁(部之介選) 揮毫(卷二選)

無記名(赤陽選)

獸性の眼に宮守這ふ真夜中だ

凶候の壁にはつきり宮守ゐる

やもりの様な無氣味な奴は撲滅だ

雑巾を絞つた様な空宮守が落ちた

燈籠に影繪の如くやもりゐる

氣味悪き夜だやもりの目が光る

早魁だ百姓の聲がふるへてる

早魁をよそに地主の涼み臺

早魁の村太陽は血の色だ

早魁の鎌さび切つてさび切つて

野良者の欠伸早魁の田が白い

早魁! 穩やかならぬ鎌同志

ダリヤよ女の媚が流れそだ

ダリヤよ君は娼婦の花だ

赤ッ赤なダリヤに課長室のひる

片意地が揮毫をしてる窓の風

讀めぬ字で書て揮毫のそれでよし

揮毫の秘書は墨をすらすされる

無記名の中にはつきり右下り

無記名の手紙笑つて見せるなり

無記名はうれしき彼の繪封筒

無記名の美譽がさなる慰問金

無記名のレターへ夜の物思ひ

磨須雄

川柳西條句會(愛媛)

六月 於支部事務所 荒井英賀夫報

添寢(矢舟選) 鏡臺(村雨選) 青(英賀夫選)

釣(孤鶴選)

借浴衣一人はポスト聞いてゐる 孤鶴
晚酌の氣嫌へ淡衣着て出かけ 英賀夫
子を産んでからの鏡臺曇り勝 西英子
鏡臺は今宵もだます 事を知り 矢舟
鏡臺の前にはせたいい 牡丹刷毛 狂一波
鏡臺から一寸持つての聲を聞き 義耶
鏡臺にへそくりがあり妻は留守 英賀夫
添ひごける姿を鏡臺へ微笑み 孤鶴
風鈴へ添寝す母の夢が伸び 矢舟
釣舟の釣れなくなつて飯にする 英賀夫
新調の釣具へ不漁の憂鬱 村雨
玄人を真似て揃へた釣道具 矢舟
釣れなだ歸り裏道そつと抜け 孤鶴
青緑の波に情熱ゆれる夏 西英子
青空へカンとひびひるたホームラン 矢舟
青い灯を出れば満せるアスハルト 孤鶴
青空へ両手を上げて深呼吸 村雨
菱餅の中にも青の好く似合 英賀夫
自殺者を救つたあとの水青さ 義耶

石森靜太報

七月九日 兼題 炎天

炎天や街には子らがつかれてる 愚寵
炎天ラヤオ物憂く鳴つてゐる 松雨

雜誌柳螢ヶ池小集(大阪)

炎天に蟻は蟻らの生活や 靜太
炎天の空から落す始球式 一馬
炎天へ圓タリ砂塵の渦を巻き 登志界
炎車が續く田圃でもめてゐる 舟家
荷車が續炎へてゐるアスファルト 緋紅

兼題 關

梅干を詰めて關ひの朝を出る 松雨
關ひに勝つたが敵首になつてゐる 靜太
關ふ氣になつてポケットが軽すぎる 同
蟲けらも生きんが爲の關争だ 一馬
關争の知らず背の子うれしがり 登志男
關争のレビスユーガルへ灯が暗し 舟家
敗殘の身をば療衣にかこみゐる 緋紅

兼題 雲

雲映る晴は沼のごとく澄めり 松雨
美しき入道雲を友とみてゐる 靜太
病める子の雲に寝し涙する 同
雲を追ひてく寂しき日 一沫
雲行きのごんぐん迫る低氣壓 一馬
大空にぼつ然とある千切れ雲 緋紅

川柳鶴町句會(大阪)

六月十九日 鶴町高野山に於て故金太氏一週
忌を執行、花月會より多數の活花の供養あり
本社より紳樂、水車、里十九の諸氏來援あり
參會者參拾名(戀人記)

兼題 慰

不由さ慰め合ふて共に生き 紳樂選
慰めて後 姿と岐れ道 交破坊
慰めて貰ふつもりで娘すれ 山月
海へ出て蟹に慰められてゐる 小柳子

サーピスの一ツ女給は泣いてやる 雅幽
慰めの眞白き蕎麥の花さびし 鮎美
慰めの女の顔が白すぎる 變人
も一度慰めて居る曲り角 同
なぐさめて二人の足が揃ふなり 同
慰めの聲に兵士も胸せまり のぶを
慰めの言葉もつきて手を握り 同
慰めも男同志は笑ふのみ 水車
落葉見つめて心落ちつげん 岩石
慰めて慰められて共に泣き 同

兼題 寺

フト父に逢ひたくなつた寺詣り 水
故人なる金太を語る寺のふち 岩石
蜂一ツ廣いお寺を靜かにし 柳一
神妙に手を合はしてゐるモカとモホ 上幽
一週忌寺で語つた君と僕 山
本堂に一人の心も去らぬ寺に 里十九
うたがひの心も去らぬ寺に 突破坊
寺まゐり孝行者にされて居り 同
國寶へ苦行を語る高野山 同
墨繪が怖い寺の夜なり 山月
善人の姿で寺の門を出る 鮎美
之からは何處へゆくと寺に 變人
たましいの君は光の中に居る 鮎美
席題 思ひ出 里十九選
思ひ出の蚊帳の中に寝返れり 變人
思ひ出はばつかしかりし若かりし 紳樂
ありし日の故人の氣性思ひ出し 山月
廣い座敷で君のありし日を思ふ 矢石
思ひ出は少しはなれて涙ぐみ 水車
思ひ出の濱にボートが揺られて居る 寛柳

亡き妻のあゝもこうもしてくれた
喧嘩した事も話して一週忌

思ひ出に笑はぬ君のたましい朝
(佳)思ひ出が尻を軽くさした朝

(同)思ひ出の胸一げいの氣笛なる
(同)思ひ出をされから話を一週忌

(同)思ひ出を話固アスフアルト
席題 ほたる

ほたる狩りから彼女を知り初め
ほたる狩り姉は遠くで籠を持

塵紙に包んだ蝨すかか
ほたる狩りなど都の人がくる

淋しさ蝨が一ツ闇を縫ふ
ほたる狩り一人娘の姿なり

ほたる狩り女の聲がかんだかい
在りし友語りてゆけばとぶほたる

逃げてゆく蝨に見ゆる耕の子
ほたる籠電車へのつてのぞかれる

ほたる狩りみぞへはまつた大笑ひ
(軸落)見せてほたるは飛んで

席題 花 雅

花環はご見ごたえのない舞臺なり
活花よ故人のくせをほめて去に

花ビラのの一ツにたのむ戀もち
好きだった花で棺をばうづめんか

花一輪熟の下さた床に咲き
活花へ仕度の出来た妻がぐる

川柳 八束句會 (島根)

雑社 七月八日夜 於日野理髮館 六郎報

兼題 直 射 天痴人選

秋 幽月

雅 幽月

正 路

白 峰

水 車

岩 石

人選

里十九

諺 公

碧 郎

秋 月

艸 樂

白 峰

小 柳

水 車

雅 幽

一 笑

同 笑

變 人

幽 選

里十九

岩 峰

水 石

變 人

同 人

君見給へ蟻は直射を恐れんよ
ヘッドライト二人を浮き出させ

臍は浮動しつゝまなつの直射に
トッドライトが描出す街の立體畫

(秀)ツインクの直射に二十四の男
(同)直射曲射の戀も飽きて三十路

(同)ビルディング直射に堪へぬなり
(同)攝氏九十度は眩射に光るなり

(同)百姓は飢えを強き陽の直射
(同)感情の交叉直射をさけてゐる

兼題 西 瓜 檳

西 瓜の分列店頭の食慾
晝休み西瓜を井戸に吊つて寝る

口紅の色を西瓜に吸ひ取られ
長い顔、丸い顔の西瓜市場

西瓜切る娘のうでをあやぶまれ
満腹の皮を並べて西瓜番

舊友を訪へば西瓜の味となり
美味そうな色に西瓜をパンと割り

満月へ基数を呼ぶ西瓜番
(秀)立腹の曇さだ西瓜を叩き割る

(同)クレオンの西瓜は種が大きぞ
(同)約東の西瓜は種に起される

(同)健康な食慾西瓜をとりまいて
席題 伊達巻 都之助

伊達巻の色あせてゐる旅藝人
伊達巻きへいきな姿の女達

伊達巻を背に冷たく見せてゐる
伊達巻のみだらな線はすれてゐる

湯上りにいきな伊達巻月をほめ
伊達巻きへ父の眼は外れてゐる

莞 路

檳 榔

都之助

檳 榔

六 郎

同 助

青 波

都之助

六 郎

ますを

椰 選

ますを

六 郎

遊 星

田の字

天痴人

青 波

六 郎

同 人

莞 路

青 液

天痴人

助 選

田の字

みのる

莞 路

鹿 助

祥 月

檳 榔

伊達巻に惱みを秘めて女居る
伊達巻は男を知つた姿なり

意地ですよ伊達巻つんと横座り
満足の意識伊達巻はぐれゐる

席題 夜行列車 卷

夜行車のゆるるが儘の窓の月
夜行車の獵奇を語る夏休み

愛人と二人におそい夜の汽車
終列車すりくたびれた様に居る

金策に盡きて夜行の三等車
夜行列車唯萬歳の餘波を受け

噴はれてもいゝ東京の夜を起ち
終列車不幸の罪はゆるしてぬ

午後八時大坂行きは胸を焼く
席題 軍用犬 祥月、莞路共選

軍用犬功賞は菓子ですまされる
足音で敵を見分ける軍用犬

負傷兵知らせに歸つた軍用犬
落伍兵軍用犬の連れになり

軍用犬大満洲と土煙り
見張りする軍用犬が頼もしく

軍用犬敵を見付けたすばしこさ
軍用犬車歌ばかりをきかされる

血まみれの軍用犬に負けまいぞ
席題 非 難 青波、遊星共選

非難とは承知してゐる立場なり
非難なご今一時だ發明狂

その非難酒がくさせたえんだ
非難の聲七十五日に立ち消え

非難なごそれは女々しい態度です
彼女非難へ六感は動きぬ

青 波

卷 二

天痴人

同 人

遊 星

二 選

天痴人

祥 月

田の字

檳 榔

青 波

莞 路

同 人

鹿之介

莞 路

みのる

遊 星

同 人

青 波

檳 榔

卷 二

天痴人

青波、遊星共選

遊 星

田の字

卷 二

鹿之介

青 波

祥 月

席題 汗

翠 夢選

すこやかきたらう汗の香汗の香
汗ばんだ息ストローへ寄り沿へり
亢奮の汗引際の冷たすぎ
此の汗へ親子四人が無事な顔
汗が出る通つた道は裏の裏
光つて落つる音が一日の汗や血や
汗ふいてくれる女の鬢が觸れ
汗ふいて今日の生活の足袋をぬぎ
セネストだ機械も汗をかいてある
汗だけは一人前に流してて

紀太 紫石 多郎 四葉 平六 同 正夫 人選

電車道派手に御神輿渡りけり
それナンバそれホオツキと夏祭
お祭を見る店員の白いシヤツ
おみこしの後追つてゆく肩車
燃え盛る篝へ映へる人形船
行水の半ば祭へ誘はれる
（佳）ちとキツイ師匠になつて夏祭
（同）夏祭六神丸をのんでゐる

詩郎 紫石 紅人 同 海洋人

比古

魂の陰で至藝が踊つてゐる
（人）鞭たれて泣き得ぬ犬の球のり
（地）藝術の遠く夢の種のみてゐる
（天）食ふもの藝が二階へ戻つて來
（軸）藝一つ出來て仔犬が貰はれる

正夫 比古 葉平 路郎 琴人 耶選

菊五郎を見て
藝のない男が隅で詩を吟じ
胸病んでからの藝術至上論
中元はいつそ商品券にする
中元へ口の上上手な事をほめ
中元のついで借金のおぼしとき
中元の隅へ小さい女文字
中元の品に相談まとまらず
（佳）始めての中元に道を迷ふなり
（同）中元に奥様と知る初対面
（軸）メイドイ、イングリッシュ中元

豆秋 裸人 變人 綠石 同 銀波 紅人

六月廿二日
有難や天神さんも舟に乗り
盃のさゝもゆれてる船座敷
救護船かもめ涼う止つてゐる
出た船へうつゝともなく波を聴く
帆を揚げてからの船頭歌になり
渡し舟女はしやがむものにきめ
沈みそうに石炭舟は曳かれてる
渡し舟ごっこいしようが一人乗り
三角帆童話のやうに海に浮き

生報 耶選 正甫 方一 柳秀 路生

比古

兼題 藝 琴 人選

兼題 朝 路 耶選

兼題 西 瓜 變 人選

兼題 園 碁 將 棋 路 耶選

（同）その氣持半言へず歸る日の雨
兼題 榎 側 互
榎側に不幸な姉の一人居る
よいは榎側まで來て抱き取る
榎側に胡坐をかいた久し振り
榎側にはつきり獨りボチを知る
榎側が白く乾いて危篤なり

比古 詩郎 窮巢 銀波 變人 紅人

比古

兼題 夏 祭 綠 雨選

兼題 半 分 豆 秋選

兼題 氷 半 分 水 と な り
半分の境へ庖丁そつとあたり
半分を先にとらす弟なり
半分を見せせて女に憎がらせ
（佳）半分聞いて恐ろしい事と知り

兼題 園 碁 將 棋 路 耶選

片眼の將棋は來て冷めたゴロヒです
椽臺の將棋は來て肌をいれ
わざとらしく負けはなぬ碁を圍み
詰將棋サクラは派手に詰で見せ
だままつて石を掴んだ手の白さ
碁に耽る様に勉強もして欲しい
差支へり其實は園碁の客
持碁でない筈だ疊を撫で廻し
上役の嫌ひなものに園碁將棋
碁にも負けコッにも負け口惜む
はしもの歩をつとくだけけの慎重さ

比古 詩郎 窮巢 銀波 變人 紅人

比古

天王寺句會

（大阪）

七月十日

於内藤製作所

須崎豆秋報

兼題 夏 祭 綠 雨選

兼題 半 分 豆 秋選

兼題 氷 半 分 水 と な り

兼題 園 碁 將 棋 路 耶選

引き潮へ風は小さくなつてゆき
 汐千狩聞かれて困る貝もあり
 渡船引き潮へ来て足が
 (佳)引き潮へ来て入港のひまわり
 (同)引き潮へ船頭は思案めいてる
 (同)引き潮へ斜に並らぶ蠣料理
 (同)引き潮へたゞ船頭を信じ切り
 (秀)引き潮へたゞ船頭を信じ切り
 (同)引き潮へ彼の家の捨物が見
 (軸)引き潮へ舟の親子はれむる

かほる居偶會

六月二十一日
 二枚目舞臺をはでにして返し
 心中の舞臺に困る三枚目
 まつすぐにしようぎへがる三枚目
 打水へ駒下駄で来る圍ひ者
 友問ば蝶六の形で水を打ち
 打水の向ひもちようご空になり
 打水の此の邊は皆よい暮らじ

観劇句會 (その四)

六月三日 於大阪歌舞伎座 水谷鮎美報
 鏡獅子、山科閑居、寺小屋
 身替座禪
 音羽家は二枚扇の型となり
 大舞臺がちいさく見へ獅子の振り
 十九貫五百六代目の舞踊美
 内藏之助主税をきつ叱りつけ
 遊女らの眼に大石の眼がにぶり
 大石の誠心がわかる雪あかり
 松王は頻で机をよみはじめ

小柳子 光 紅 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 雅分變變變變變變變變變變變變變變變變變變變變變變變
 幽銅人人人石

お手本のような 寺子屋幕が閉ぢ
 所作事の舞へば銀の花片が散り
 太郎冠者は迷惑なごばかり
 奥方の嫉妬へ股は舞ひつゞけ
 手拍子の殿醉ふほごに
 柳風呂 (その六)
 つばめ、田舎、螢、海水着
 水谷鮎美報

親つばめ子つばめのくちあくなき
 雲先るひかりのなかの燕かな
 父の盾もまだ老ひませず躰ひかる
 桃の實は熟す田舎の子ら遊ぶ
 螢いまそちらへ飛んだ子が走り
 海の螢へふたりで指さしぬ
 海水着歸りの道は邪魔になり
 大波小波 海水着の晝
 海水着ヨットで走るおもしろさ
 島の娘の働く唄がよくそろひ
 父と娘の船唄聞ゆ朝の海
 冷奴夫婦の箸に氣がはれる
 つどひ 第十四回

山 吉田水車報
 山霞キャンソブの人の眼覚むりぬ
 夕立の來そやうな山の色となり
 月上ぐれば山靜かに眠りある
 裏山はラヂオ体操の聲となり
 えらかつた山を見かへる二人連れ
 山一つ越して詭もなつかしく
 久しぶりテツキへ迫る山の色

川柳 いかだ詩社 (松江)

六月九日夜 於事務所 岡崎祥月報 玉城莞路選

戀の解消はほろ苦き酒となる
 解消とは別に許して清き愛
 結 婚 解 消 へ 野 心 有 る 夫
 慚 愧 有 る 解 消 だ け 露 知 ら ず
 世のうわさごうであらうと解消だ
 解 消 は 婦 人 解 消 の 一 頁
 血も骨も何んにもないよ三原山 卷二
 席題 落下傘 松本青波選
 パラシュニーターが案外低家に住る 卷二
 落下傘風の流れに乗つて行き 同
 童心に歸る冒險劇や落下傘 夢迷
 青空パラシュートの白点よ 磨須雄
 落下傘煙と同じ流れよう 卷二
 席題 海水着 梶谷巷二選
 魅惑する真夏の海と海水着 青波
 海水着のその曲線に殺された 赤陽
 海水着上ればすぐにコンバクト 瑩路
 泳げない二人にいきな海水着 祥月
 十八九海水着にも見へて居る 磨須雄
 病床へ取出して見る海水着 夢迷
 コパルトの空にマダムの海水着 青波
 海水着海の深さを知つてゐる 祥月
 海水着はちぎれそうなる肉體美 夢迷
 席題 松葉杖 岡崎祥月選
 松葉杖妻に感謝の日が續き 瑩路
 慰靈祭松葉杖には涙する 青波
 押賣の音で出て来る松葉杖 卷二

思ひ出は戦場の事松華杖
松葉杖世のつめたきにふれてなく
松葉杖功七級でなぐさめる
赤路
巻二

席題 暑の讀み込み 互
水銀が暑さに堪へず狂ふなり
夕顔に暑さ忘れてしまひそ
避暑なんてプロの意識に遠すぎる
巻二

避暑の音下界の暑さとんで行き
酷暑のみざり彼女の筆はさえても
扇風機かけて暑さの話なり
巻二

田園の主人となつて背の暑さ
蚊帳吊つて寝返りを打つ暑さなり
巻二

氣を吐いたつても暑さの加減に
暑さが仕はせて居るコンバクト
巻二

席題 慰問金 奈良井柳人選
慰問金子供の預金が今知れた
巻二

東れ髪わすかながらも慰問金
うるわしい心を見せる慰問金
同

慰問金我が帝國の強みなる
慰問金すまない氣持ちで一錢銅貨
巻二

せめてなり慰問金にてなぐさめん
慰問金募集へ留守の果敢なきよ
巻二

慰問金その銅錢もありがたい
慰問金唯一錢も誠意にて
巻二

(軸)慰問金蚊帳の中から断はられ
柳人

光笑會々報 (大阪)

七月十六日 於カナメ喫茶店 永田里十九報

兼題 踊り姿の若い額 蝶之助
兼題 踊り かほる選

閑な事踊の手なご考へる
踊れ〜と座はしらけてぬ
踊る氣はその手拭を持つて出る
踊りながら舞臺半分ほど廻り
總踊りざれば一番シヤンかいな
白柳子選

席題 井戸替へ女中バケツを二つもち
井戸がへに隣へたのむ男の子
井戸がへへ親猫らしく泣いてゐる
井戸替に先妻の櫛現はれる
同

(軸)井戸替に蠟燭の火の深さなり
白柳子
席題 豆しほり、燈籠 五

豆絞りなじみに逢ふてのりが落ち
豆絞り頭半分ほごく〜り
燈籠と知つて安心した夜中
燈籠に全盛なりし名を刻み
豆絞り富士山組は今出かけ
燈籠の苦へ座はつた青蛙
道行に使はぬらしい豆絞り
燈籠の影の蜘蛛の集ゆれてゐる
戀人ととらうまでは無言なり
燈籠へカサリとびびく客の石
豆絞り今夜の兄貴酔ふてぬす
まあい〜さ俺にまかせと豆絞り
驛迄に一汗をかきと豆絞り
團體は燈籠の前にならばされ
燈籠の灯をつげにゆく弟子坊主
呼びもの〜一つになつた大燈籠
持つ人が持つてこそ豆絞り
豆絞りあんな田舎へ忘れたり
同

白柳子
銀波
かほり
同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

豆絞りでおはんのほ〜かむり 同
手懸りは只一ト筋の豆絞り 同
下品とも粹とも見える豆絞り 同
陸會 句會 (神戸)
六月二十四日 於岩崎居 明珠報
兼題 テバート雑感、微笑、夕涼み
月給日 清記 五選

玩具とは思れず四拾五圓 彌之助
用もない奴ばかり居る百貨店 實
先生の着物と出會ふ百貨店 明
テバートを意氣揚々と出て來たり 同
微笑した男へ嘘が言ひ易し 同
微笑みが彼と彼女の第一歩 彌之助
初夏の風振の微笑も朗らかに 實
童心へ微笑み夏の夕涼み 彌之助
夕涼み故郷の川をなつかしみに 岩崎
夕涼み軒先に見る仇姿 實
夕涼みと〜男口をきり 高崎
月給日電話がかゝる人があり 明
出勤にちと張りの出る月給日 彌之助
月給日待ち遠い春の服で居り 情
月給日どう廻はそかと苦心する 高
月給日 雄

七月九日夜 北川あや美報
翠夢氏の招待により 御旅吟社の元老連と
共に御馳走になり作句の祭の夜を更した。
例年参加下さる 路郎師琴人師の姿を見られ
なかつたのは淋しかった。
席題 水 あや美選

翠夢居集會 (大阪)

同

峰つゞきたどりついたる水の味
滴くくやつげり水はつがなし
水切つて妓は馴れたコツアなり
多 圓
郎 角

伯父さんの話寝るのを忘れたり
逢曳へ伯父の瞳を感じたり
伯父の話にキツチリ座り直したり
多 圓
郎 角

(佳)お父さんと呼ばれ歳で未だ一人
(軸)父のない子に伯父のつかひも
多 圓
郎 角

何時であるうと好きは別なもの
集合へ時間動行が来て居らず
タイムを計り過ぎてる料理が来
多 圓
郎 角

シヤッ脱げば今日の生活の汗匂ふ
窮屈なシヤッ着せてゐる妻の顔
シヤッ干して裸ぐらしの夏つひる
多 圓
郎 角

いかに詩社例會 (松江)
六月二十八日夜 於事務所 玉城莞路報
多 圓
郎 角

あの瞳ハートは 高鳴る 紺絢
初恋へ情熱の瞳の置きごころ
初恋は片戀となり白き腕
初恋は朝な夕なに息づまる
多 圓
郎 角

遊廓は晝寝盛りのしつみ賣り
待つて居たやう晝寝へ蚊がとまり
晝寝にも女の夢を追うて居る
多 圓
郎 角

愛の巢に多忙な身なりパスガール
馬にでも乗れる姿でパスガール
多 圓
郎 角

終點で夜食をたべるパスガール
パスガールホームシックな夕なり
多 圓
郎 角

七月八日 於高雄居明 (神戸)
兼題 伯父さん 多 圓
郎 角

あれこれと取らぬ狸の皮算用
手に入る迄が頼のめし
左から右へポーナスとも云へず
ポーナスを圍んで男不甲斐なし
ポーナスよせめて吾身の肉にも
ポーナスは豫定を越えた事がなし
ポーナスの札を並べて初夏の風
ポーナスの札の臭ひをかいて見る
少しなら体のためと今日も飲み
酒呑むで夜の重たさに獨りある
二人連れ何處 飲んだが千鳥足
酒やめた夜から淋しく見つめられ
後悔と酒繰返し繰返し
お堅いと嘲笑まじりのにがい酒
自薬酒に苦しい氣持 溶し込み
多 圓
郎 角

浴衣着て風になびかす子守唄
浴衣着てふとふるさとの夏祭り
しわくちやの浴衣賃しい夕涼み
うちは持つ浴衣姿の軽やかさ
アラソコにのぞく見る氣の浴衣がけ
パラソルも軒下にある雨宿り
吸殻が雨にひしがれこんでる
新しい本買つて来た雨の晝
實の本主義の塵埃の中へ生きた
大掃除埃の中に疲れてゐる
親も子も都會になれて埃吸ふ
多 圓
郎 角

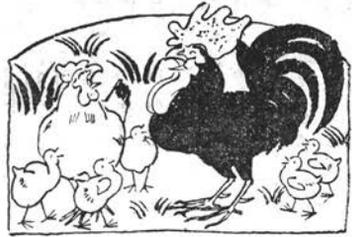
兼題 伯父さん 多 圓
郎 角

第八回畔柳社句會 (大阪)
四月二十日 於大鐵俱樂部二號室
兼題 斷 髮 山雨樓選
斷髮に田舎の驛が暗すぎる 伊八
斷髮はハズよりすこい口を利き 天八
斷髮が澄しきつてるアスファルト 秀太
保護室の寒き斷髮うづくまり 喜山
斷髮がひつかつてる非常線 九天
(佳) 斷髮の夫時々飯を焚き 某人
兼題 煙 草 山雨樓選
新婚のハズの煙草へむせんでゐる 伊八
一本の煙草に友の丸い顔 喜山
吹殻をおごらせてゐる掌の厚さ 杏林
バツカード葉巻やよひを連き降り 世忍
つれにん 吐いた煙を叩いてみ 菜人
(佳) しなやかな手の敷島へ紅が? 同人
(同) 失戀の女吹殻ふみにじり 九天
(同) 云ひにくい話へ煙草空に吹き 伊八

暑中御伺

和漢洋醫院

大阪市南區長堀橋二丁目
電話南四一八八番
醫學博士長谷川成一
私宅 大阪市東區大手通一丁目



樓雨山窓の輯編

▼盛夏八月、殺人的酷暑に拘はらず、清新潑潑とした夏期特輯をお目にかけることの出来たことを柳友諸兄と共に欣びたい。

▼巻頭に「柳壇叢報」グラフィック二頁を添えた。寫眞は何れも興趣と珍奇を集めたもの、蓋し柳誌として空前の試みと思ふ。これは漸次いる人々人達のものを載せたい希望ですから、面白いものがあれば路郎主幹宛お送り下さい。(取捨御一任乞ふ)

▼特別讀物としては、柳壇の諸名家より「柳木を語る」と題し著名川柳家の逸話、奇行、變行等を紹介して頂いた。執筆して下さった諸家へ厚く感謝の意を表します。社内熱心なる人々

の筆になる「花形十題」と共に御好評を賜りたい。

▼米本の表紙は南澤沿線高師の瀆。人物は路郎主幹夫妻及光緒抄で活躍の櫻見女さんであります。涼味を拘して頂きたい。

▼七月六日本社例會には路郎先生から兼題大阪の夏祭の披露後有益なお話があった。そして近來先生のお健康恢復と共に柳壇の爲奮に倍し活躍を續けるところの力強いお言葉を聞いて、參會者一同の眼は歡喜と期待に輝いた。

▼七月十二日の夜、「牛文錢句集刊行記念句會」が大坂卓球タ イムス社の卓球會館で盛大に開催された。これは牛文錢氏との交友最も深き路郎主幹が主催者として開かれたので、當夜は兩氏を初め川上日車氏、齋藤松窓氏及偶々來阪中の花岡百樹氏等柳壇の大先輩が期せずして一堂に會され、有益なる講演講話を拜聴することを得て、柳壇稀に見る意義深く且つ感激に満ちた句會であつた。

▼當夜、百樹翁は少し遅れて出席されたが、受付で「麻生路郎さんにはどこにゐられますか」と尋ねられた、尙會場の一角にゐられた日車氏を「あの老人は誰方ですか」と路郎主幹に聞かれるなど、二十年振りからの久闊に柳壇の巨星はそやる懐舊の情に

堪えぬものゝ如くであつた。

▼散會後前記巨星連を中心に、萬ふして杯を交して舊交を温められた。

▼巻を追ふて好評噴々たる「武玉川初篇研究」は漸く初篇の時に近づいて來た。これは執筆三先生の御努力によつて今や本誌の一大雄篇となり、古句研究家が渴望する唯一の文獻と稱され評を博しておるので更に筆硯を新にして稿を續けて頂くことになつた。

▼路郎先生は昨年九月の月上旬、臨時議會直後から青田代議士の秘書を兼務されてゐたが最近秘書を辭されて新に「喫茶新聞」を刊行されることとなつた。

之を祝する企てを主幹へ謀つたところ、祝詞刊の廣告は一般からも頂かぬ感謝いたしますが、固辭されたのでお知らせします。尤も同新聞には柳壇も設けられることですから、柳友諸兄の應援的御購讀をお勧めします。

▼町二君が「再び定型非定型を論ずる」得意の筆陣を張つた。僕と町二君とはこの問題に付ては聊か見解を異にするところあり今後とも尚、眞摯と熟意を以つて正々堂堂と相闘ひ、相磨きたいて期してゐるのである。にも拘はらずこの問題を中心にして何か社内に暗闘でもあるかのやうに憶測するものがあるのか耳にする。片腹痛く、ちやん

暑中御伺

遙に諸氏の御健康を祈る

麻生路郎 乃郎

は先生が同業組合の副組合長や大阪府料理飲食業組合聯合會の役員をされてゐる關係上洋飲食店の繁榮機關として計劃されたのである。「喫茶新聞」の發展と共に、先生の興味深い文章と御研究を讀まれること、欣びに堪えない。

▼右の「喫茶新聞」の發刊に付て

ちやんおかしき限りだ。

▼安川久流美氏其他から興味ある隨筆の御寄稿を頂いてゐるが御覽の如く大體記事が軋軋しましつたので遺憾乍ら割愛する。

▼別項で披露して頂きます通り「川柳パイロット欄」を新設致します。初心者の方は奮つて御利用あらんことを祈ります。

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樞」は全家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
- ▼各地會報は牛紙判の原稿紙に清肥の事。
- ▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に未記する事。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼投稿其他につき問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十卷第十號課題

八月五日締切

(各題十句以内)

- ▼風 松盛 琴人選
- ▼坑 夫 松丘 町二選

第十卷第十一號課題

九月五日締切

(各題十句以内)

- ▼煙 大島 濤明選
- ▼剃刀 生田 翠夢 共選
- ▼廣江 天痴人

每號募集

- ▼近作柳樞(十句以内) 麻生 路郎選
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、贈謝廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所に願ひます。

定價

- 一部 金拾錢
- 一 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
- 壹箇年前金(特輯號共)壹圓六拾錢

廣告

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼請代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和八年七月廿五日印刷
昭和八年八月一日發行

第十卷第八號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所 川柳雜誌社
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話天下茶屋二五七九番
事務所 川柳雜誌社
大阪市住吉區平野西之町八三番地
電話天王寺一六七番

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六七番

賣捌書店
(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他市内各書店)
(東京) 仲見世 玉森堂(神戶) 米田、寶文館(願館) 石塚
(京都) 三宅 (名古屋) 弘文舎 (石川縣) 小松はかりや

(順はろい)

川柳雜誌關係人の々

贊助員 客員

池澤樂居 伊藤彦造 鳥山一歩 大谷三村 岡本平方 片岡直方 笠原純生 嘉納純二 長崎柳秀 長岡半太郎 長野晴濱 國枝史郎 藤村史郎 藤本卯之助 赤井清司 淺田一司 末弘嚴太郎

柴谷柴舟 中見光路 中澤濁水 村上松夢 上野錦裡 桑原京水 山本雨迷 松下小柳 松位汀柳 增野秃山 奧野紅山 熊谷紅山 江戶みづる 阿形一杉 櫻井圓角 北山悟郎 喜多春秋 岸上錦石 立井登美坊 谷村八歩 大西貴步 友淵貴山 西村明月 西村珠月 春元紀太 市場没食子 石曾根民郎 生田翠夢 生友 藤里好古 森東魚 萩原春雨 蛭子省二 藤子好古 藤里好古 柴谷春雨 榮谷春雨 榮谷春雨 榮谷春雨 榮谷春雨

編輯局(同人)

道頓堀支部(大阪市)幹事庄 万よし
 九三會支部(大阪市)幹事北山 悟郎
 神戶支部(神戸市)幹事日野 華水
 函館支部(函館市)幹事龜井花童子
 高知支部(高知市)幹事中澤 潤水
 梅田支部(大阪市)幹事永田里十九
 蟹ヶ池支部(大阪府)幹事石森 靜太
 田邊支部(和歌山)幹事辻 左馬
 簸川支部(島根縣)幹事尼 綠之助
 豊橋支部(愛知縣)幹事白井 梅里

加古川支部(兵庫縣)幹事宮田 泰山
 京都支部(京都市)幹事平岩 司郎
 鳥取支部(鳥取市)幹事中島 鐵洲
 堺支部(堺市)幹事八木夜美路
 松山支部(松山市)幹事河合 紫石
 守口支部(大阪府)幹事朝田 新水
 御旅支部(大阪市)幹事生田 翠夢
 高岡支部(富山縣)幹事越田 久水
 天王寺支部(大阪市)幹事福田 鶴峰
 鶴町支部(大阪市)幹事妹尾 變人
 小松支部(石川縣)幹事上野 錦水

御池橋支部(大阪市)幹事村松 夢裡
 松江支部(松江市)幹事奈其井 柳人
 塗青支部(大阪)幹事熊谷 紅
 西條支部(愛媛縣)幹事荒井英賀夫
 光輝會(大阪)幹事竹内觀見女
 萩茶屋支部(大阪)幹事奥野 禿山
 北濱支部(大阪)幹事吉田 稔
 今里支部(大阪)幹事吉田 水車
 奉天支部(奉天)幹事江戶みづる
 八東支部(島根縣)幹事平塚 亂笑
 野上支部(和歌山)幹事野添 修一

道アラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいい。古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道アラの次に公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。
(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が従來の店の一軒置いて北隣へ移りました。従來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五六二番

加茂川句會

日時 八月十日(木)午後七時
會場 円源寺(京都四條繩手東入)
兼題 「行商三句 司郎選
會費 金 參 拾 錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方
京都支部

社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせを願ひます
大阪市住吉區旭町三ノ一四
會報係 須崎 豆秋

天王寺句會

(日時) 七月十一日午後七時
(題) 「本棚」三句
(所) 大阪天王寺區大道三丁目
内藤製作所

瀧の吟行

八月十三日(日曜)朝九時
京阪電車天滿驛集合
行先 京阪沿線 源氏ヶ瀧
會費 電車賃共二圓
瀧の音でもきき乍ら寝ころんで句に浸り、盛夏を忘れて來ようでお出かけ下さい
主催 光 笑 會
幹事 永田里十九

川柳雜誌投句用箋

▼本社副規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴二冊 (價金拾二錢) (送料共)
▼御申込は本社事務所宛。
(二錢切手代用不苦)

懸賞川柳募集

題 「美 む」路郎 選
八月十日締切
その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ (化粧柳壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
化粧新聞社

懸賞喫茶柳壇

題 「女 給」路郎 選
八月十日締切
▼用紙 官製ハガキ (喫茶柳壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟 大阪市玉出本通三の三六
喫茶新聞社

川柳手拭 路郎主幹
の染筆 一種 金三拾錢
(送料共)

暑 中 御 伺

新川柳の指針

雨迷、汀柳
一夫、六浦
葉平、一步

月刊
川柳たまむし

大阪東淀川中津濱一

柳 風 會

信州湯田中温泉
湯の村發行所

川柳社
九三會

大東明安北
西谷石山西

八聞柳杏梧
步路三次郎

大阪市東區南久寶寺町
三丁目二九北山方

川柳社
北濱支部

板羽清二
谷村稔
森川佳風

暑 中 御 伺

大 島 濤 明

大連市西公園町
川柳 居 平 洞
電話 自宅三七一三番
振替口座大阪二五六五番

暑 中 御 伺

色紙、短冊の御用は

大阪市東區安土町堺筋西
川柳雜誌社指定

書畫用品商 和 正 堂
風流雅品

電話 本町二一六番
振替大阪九一七五番

◇境界の偉観！

川 柳 叢 書

一冊・金二十錢・送四錢
各篇菊半載版百頁以上
全頁・二度刷用紙上質
製本がワリ綴箱入美本

- 川柳叢書 第一篇 松窓句集 齊藤松窓編 既刊・殘本僅少
- 川柳叢書 第二篇 福造句集 藤本福造編 既刊・殘本僅少
- 川柳叢書 第三篇 半文錢句集 木村半文錢編 既刊百二十八頁
- 川柳叢書 第四篇 川柳は斯うして創れ 木村半文錢著 既刊二百五十頁 本篇二冊二付 送共四十六錢
- 川柳叢書 第五篇 川柳街第一句集 齊藤松窓編 八月刊行
- 川柳叢書 第六篇 川柳街第二句集 大島黃子朗編 八月刊行
- 川柳叢書 第七篇 六厘坊句集 路那・當百・松窓・半文錢合纂 九月刊行
- 川柳叢書 第八篇 柳舟、六好、富士子句集 齊藤松窓編 九月刊行
- 川柳叢書 第九篇 川柳類題句集(一) 吉田綠朝共編 十月刊行
- 川柳叢書 第十篇 川柳類題句集(二) 澤田佐一郎共編 十月刊行
- 川柳叢書 第十一篇 川柳久良伎 森鷗牛子編 十月刊行

川柳叢書刊行會

振替送金は...東京 都 市 北 白 川 伊 織 町 望 社...振替大阪六九三二〇

暑 中 御 伺

諸賢の御健康を祈る

渡 邊 虹 衣

大阪市天王寺區上ノ宮六一

阿 部 閑 生

大阪市外豊中千歲通二丁目
電話岡町九〇九

福 田 山 雨 樓

大阪市浪速區湊町保線事務所
電話戎一〇〇三番

中 澤 濁 水

高知市本與力町

柳 大 門

大阪市淀川區十三東之町二四

大阪帝國大學醫學部

長 崎 柳 秀

富 士 野 鞍 馬

東京市王子區堀船町
一丁目 一三四

川 柳 雜 誌 社

塗 青 支 部

川 柳 街

京都大宮寺ノ内南
(見本進呈) 川 柳 街 事 務 所

振替大阪一五〇七五番

伺 御 中 暑

河合紫石

松山市榎田一九
電話一〇二六番

宮内耕朗

臺中市榮町一ノ二

山本丹路

大阪市南區鹽町一ノ五一

川柳雜誌社

西條支部

愛媛縣新居郡西條町
荒井英賀夫

川柳雜誌社

神戸支部

神戸市神戸區中山手通
七丁目二七日野華水方

川柳雜誌社加古川支部

宮田泰山
水田光哉

橋本緑雨

大阪市住吉區平野西ノ町八三
電話天王寺一一六七番

川柳雜誌社奉天支部

江戸みつる

奉天千代田通三七
寺庄洋行内

八三、二九 魚崎海岸に移る。
海と山電車も家も口ハですの
八四、三 天徳天神宮神前にて結婚
とつても背高き 花嫁

安井

兵庫縣武庫郡魚崎

暑 中 御 伺

<p>西村山月 大阪市東成區深江町九八九</p>	<p>杉谷湖山 鳥取市職人町</p>	<p>竹内機見女 大阪市天王寺區勝山通り三ノ四八</p>	<p>吉川啞人 山口縣久賀町 電話一四番</p>	<p>高橋かほる 大阪府南區北炭町二〇一 電話南五九六番</p>	<p>前田五健 松江市眞砂町二二</p>
<p>岸上錦石 大阪府泉北郡高石町羽衣六番地</p>	<p>奈良井柳人 川柳雜誌社松江支部 松江市雜賀町</p>	<p>上野錦水 石川縣小松町本折町 電話五八番</p>	<p>三好計加 愛媛縣道後湯之町</p>	<p>金泉萬樂 尼崎市東櫻木町四二</p>	<p>尼綠之助 川柳雜誌社簸川支部 島根縣今市町</p>
<p>戸倉普天 兵庫縣川邊郡川西町鶴ノ莊</p>	<p>塚本掉二 大阪府港區繁榮町一丁目三五</p>	<p>「ふあうすと」 菊版四八頁 一部十五錢 神戸市林田區御崎本町三丁目 ふあうすと川柳社</p>	<p>今治川柳研究會 今治市松本通一丁目 渡邊曉童</p>	<p>國澤春水 高知市朝倉町</p>	<p>八東支部 ABC吟社 松江市外古志原</p>

暑 中 御 伺

<p>横山 勝二 大阪府豊中町新免九二二</p>	<p>福田 鶴峰 大阪市天王寺區北河堀町六九</p>	<p>俣田 華峰 石川縣金石町港町</p>	<p>平岩 司郎 京都市嵐山天龍寺前</p>	<p>松盛 琴人 (轉居) 大阪市東區平野町二ノ十一</p>	<p>今里 支部 吉田 水車 大阪市東區片江町四五三</p>
<p>姫田 夕鐘 大阪市港區東田中町八ノ四四</p>	<p>水谷 鮎美 大阪市西淀川區大和田町六三六</p>	<p>永田 里十九 大阪市南區疊屋町六</p>	<p>揚井 二南</p>	<p>番傘 川柳社 大阪市南區心齋橋筋二 なぐらやビル内</p>	<p>松丘 町二 大阪市旭區別所町五一</p>
<p>川誌柳 御池橋支部 西區四少橋南 日本樂器會社大阪支店內</p>	<p>安井 一羊 西 井 いわを 後藤 青兒 村松 夢裡</p>	<p>竹田 芦穂 大阪市港區八條通二丁目</p>	<p>須崎 豆秋 大阪市住吉區旭町三ノ一四</p>	<p>中西 おさ 大阪市住吉區駒川町八ノ二二 竹内</p>	<p>中西 おさ 大阪市住吉區駒川町八ノ二二 竹内</p>

暑 中 御 伺

川柳
雜誌社
萩之茶屋支部

石	赤	桝	矢	三	宇	木	奧
大田 屋西一ノ 中河一 内郡地	布大 施府 町中 菱屋西 一ノ二 地郡	布大 施府 町中 菱屋西 一ノ二 地郡	彌大 刀府 村中 小若江 四七〇 地郡	旭大 北府 通市 一ノ西 九成 地地	生大 野府 町二ノ ノ東 四八 地地	東大 四府 條市 三ノ西 一五 地地	旭大 北府 通市 一ノ西 四成 地地
柳女	松彌 佐男	寶山	田太 公望	輪九 文錢	高窮 巢	村銀 波	野禿 山

川柳
雜誌社
螢ヶ池支部

三	福	丸	龜	濱	石
谷	田	橋	井	渦	森
梨	縷	松	愚	蔦	靜
風	紅	雨	寵	紅	太

力 十 又 喫 茶 店

經 營 永 田 里 十 九

大 阪 市 南 區 疊 屋 町 六

署 中 御 伺

川柳
雜誌社

御旅吟社

(電東六八三七番)

大阪市東區粉川町一六、生田方

東區粉川町一六

東區十二軒町二六

春元

東區十二軒町六

神戶

東區和泉町二丁目一八

松田

東區十二軒町 春元方

近藤

東區豊人町二丁目二六

櫻井

東區内久寶寺町三 五十次特許方

北川

東區内久寶寺町四

芝

西成區西皿池町二七

道田

浪速區貝柄町六

白井

南區東賑町一九

村上

翠

紀

正

多

い

さ

圓

あ

つ

や

美

角

む

郎

夫

太

夢

葉

平

仙

羅

翔

奎

上

署 中 御 伺

川柳雜誌社鶴町支部

大正區鶴町一ノ一七

石村

大正區鶴町三ノ一一〇

岩橋

大正區泉尾中通り一ノ六五

加藤

大正區三軒家西二ノ六

松下

大正區鶴町市電寄宿舍

照屋

大正區鶴町三丁目八八

宮岡

同

宮岡

大正區鶴町四ノ一六四

妹尾

大正區鶴町三ノ一一〇

關本

大正區三軒家市場通り二ノ四六

林

大正區鶴町一ノ二四

角田

正

岩

一

柳

子

笑

石

路

寬

柳

白

峯

子

公

變

人

幽

雅

け

る

ぶ

を

伺 御 中 署

弊社の特種設備

高速度式嶄新輪轉機の設備と活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、

活字豊富にして新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

營業種目

新聞雜誌印刷
圖書出版引受
紙型鉛版活字製造販賣
各種製版印刷
其他附隨事業一切



社主 藤本 卯之助

「川柳雜誌」創刊
以來の印刷所

藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目

電話東一七〇番・七七〇番
振替大阪八二八四番

養榮の髪毛めせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全

清 酒

暑中御伺

白鶴禮讚

白鶴をチントンシャンと提げて来る
 午後六時白鶴が待ち妻が待ち
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
 腰掛へ白鶴狭う飲むまま
 來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
 白鶴が縁こはなりぬ君さ僕
 白鶴に素直な父さなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



にきびとり

び がん する

美顔水

おもしろ
面白い様に効く!

年々の信用! 的確の効果!

▲ニキビ吹出物に——頑固なニキビ吹出物にも本當に研かに、而も何等の副作用をも伴はず、目に見えてよく効くので、非常な評判です! 年々の信用! 効果は彌々向上してゐます!

▲眞正の美の成長——尙ほ少量づゝ常用すればニキビ吹出物を防ぎ、適度に脂肪を去り、キメを細かに艶をよくし、磨き込んだやうに美しくなりますので大へんおぼれてゐます!

▼素顔の美を貴び
御家庭人の親友▲

